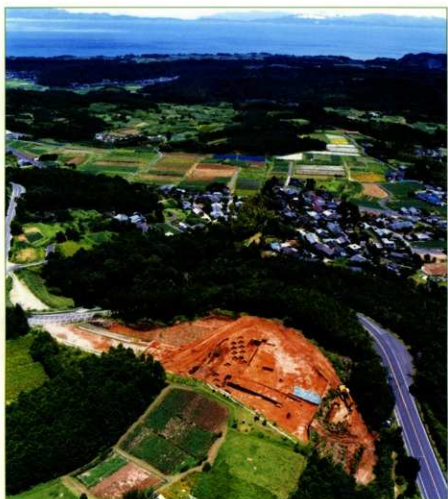


鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (51)

一般地方道知覧喜入線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)

なべ お
鍋 尾 遺 跡



2003年2月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

鹿児島県立埋蔵文化財センターは一般地方道知覧喜入線の整備事業に伴って、平成9年度及び平成10年度に揖宿郡喜入町に所在する鍋尾遺跡の発掘調査を実施しました。

鍋尾遺跡は昭和20年代には、縄文時代後期の遺物が出土する遺跡として既にその存在が知られていましたが、考古学的な発掘調査が実施されたことはありませんでした。今回は、その一部について初めて本格的な発掘調査が実施され、多くの知見もたらされました。

喜入町内では旧石器時代から縄文時代にかけての複合遺跡である帖地遺跡の調査成果が大きく注目されましたが、今回の調査でも鍋尾遺跡の文化が縄文時代だけではなく旧石器時代にまで遡ることが明らかとなりました。これらの調査によって、喜入町内の遺跡の立地や文化内容が徐々に明らかにされつつあります。本書が郷土の文化財保護や学術的研究の資料として活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御協力いただいた鹿児島県土木部、指宿土木事務所、喜入町教育委員会の関係者ならびに発掘調査に従事された地元の方々に厚く御礼申し上げます。

平成15年2月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 井上明文

報告書抄録

ふりがな	なべおいせき							
書名	鍋尾遺跡							
副書名	一般地方道 知覧喜入線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	51							
編集者名	児玉健一郎							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1			TEL0995-48-5811				
発行年月日	西暦2003年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
<small>なべおいせき</small> 鍋尾遺跡	<small>かごしまけん</small> 鹿児島県	463213	19-1	31° 21′ 06″	131° 31′ 21″	19970421～ 19970711	1,500	県道 改良 事業 に伴 う緊 急発 掘調 査
	<small>いぶすきぐんあいら</small> 揖宿郡喜入			～	～	19971104～ 19971210		
	<small>ちやうけいあざひとくら</small> 町大字一倉			31° 21′ 15″	131° 31′ 29″	19981109～ 19981211		
<small>なべおあざやまがみ</small> 鍋尾字山神								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鍋尾遺跡	散布地	旧石器時代		細石刃, 細石刃核, 石核, 剥片, チップ, スクレーパー				
		縄文時代		岩本式土器, 石鏃, 石斧, 剥片				
		古墳時代	土坑1基	中津野式類似土器(壘形土器), 成川式土器(壘形土器・壘型土器)				



鍋尾遺跡の位置

例 言

- 1 本書は、一般地方道知覧喜入線の道路整備事業に伴う鍋尾遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 鍋尾遺跡は、鹿児島県揖宿郡喜入町大字一倉鍋尾字山神に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部道路維持課（指宿土木事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査の任にあたった。
- 4 発掘調査事業は平成9年4月21日～同年7月11日、同年11月4日～12月10日、平成10年11月9日～同年12月11日に実施し、報告書作成事業は平成14年度に実施した。
- 5 本書中の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の遺物番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく。
- 8 発掘調査現場における図面の作成及び写真の撮影は、各年度ごとの調査担当者が行った。
- 9 石器の実測・トレースの大部分を（株）九州文化財研究所に委託した。
- 10 遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事鶴田静彦、同文化財研究員福永修一が行った。
- 11 遺跡の地層については、鹿児島大学法文学部教授森脇広氏の現地指導を受け、第3章第3節に指導内容を記載した。
- 12 本書の執筆・編集は児玉が行った。
- 13 遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。

（表紙：鍋尾遺跡上空から鹿児島湾を望む。東側にはシラス台地が広がり、多くの遺跡が立地する）

本文目次

第1章 調査の経過と組織	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 自然環境	5
第2節 町内遺跡の考古学的研究の歴史	5
第3節 鍋尾遺跡の調査史	7
第4節 鍋尾遺跡と周辺の遺跡	7
第3章 調査の概要	10
第1節 調査区の設定と調査方法	10
第2節 遺跡の層序	11
第3節 鍋尾遺跡の地層について	12
第4章 調査の成果	14
第1節 概要	14
第2節 整理作業の概要	14
第3節 旧石器時代ナイフ形石器文化時期(IX層)の調査	16
第4節 旧石器時代細石器文化時期(VII層)の調査	18
第5節 縄文時代早期(V層)の調査	28
第6節 古墳時代(II層)の調査	38
第5章 調査のまとめ	43

挿図目次

第1図 鍋尾遺跡と周辺の遺跡	8
第2図 トレンチ配置図・グリッド設定図	10
第3図 遺跡の土層	13
第4図 ナイフ形石器文化時期の石器	16
第5図 ナイフ形石器文化時期の石器出土状況	17
第6図 細石器文化時期の石器出土状況	21
第7図 細石器文化時期の石器(1)	25
第8図 細石器文化時期の石器(2)	26
第9図 縄文時代早期の遺物出土状況	29
第10図 縄文時代の土器	31
第11図 縄文時代早期の石器(1)	33

第12図	縄文時代早期の石器(2)	35
第13図	縄文時代早期の石器(3)	36
第14図	縄文時代早期の石器(4)	37
第15図	土坑	38
第16図	古墳時代の遺物出土状況	39
第17図	古墳時代の土器(1)	41
第18図	古墳時代の土器(2)・土師器	42

表 目 次

表1	周辺遺跡地名表	9
表2	ナイフ形石器文化時期石材別点数一覧表	18
表3	ナイフ形石器文化時期石材別重量一覧表	18
表4	細石器文化時期石材別点数一覧表	19
表5	細石器文化時期石材別重量一覧表	19
表6	ブロック別石材組成表	20
表7	ブロック別石器組成表	20
表8	細石器文化時期の石器観察表	27
表9	出土土器組成表	28
表10	縄文時代石材別点数一覧表	30
表11	縄文時代石材別重量一覧表	30
表12	縄文時代の土器観察表	32
表13	縄文時代の石器観察表	37
表14	古墳時代の土器観察表	42

図 版 目 次

図版1	調査区全景	45
図版2	遺跡近景・確認調査風景	46
図版3	土層断面・細石器文化時期の遺物包含層調査風景	47
図版4	細石器文化時期の遺物出土状況 ナイフ形石器文化時期の遺物包含層調査風景	48
図版5	旧石器時代の石器	49
図版6	縄文時代の遺物(1)	50
図版7	縄文時代の遺物(2)	51
図版8	古墳時代の遺物	52

第1章 調査の経過と組織

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県土木部道路維持課(以下「土木部」という。)は、揖宿郡喜入町一倉地内において県単道路整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会文化財課(以下「文化財課」という。)に照会した。これを受けて、平成8年度に事業予定区内を対象とした分布調査が実施され、鍋尾遺跡の所在が明らかとなった。分布調査で発見された鍋尾遺跡の取り扱いについて、土木部・文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下「埋蔵文化財センター」という。)の三者で協議がおこなわれ、平成9年4月から埋蔵文化財センターが遺跡の範囲と性格を把握するための確認調査を実施した。確認調査では旧石器時代、縄文時代早期、古墳時代の遺物包含層が確認された。

確認調査の結果を受けて、埋蔵文化財の保護と事業の推進を調整するために前記三者で遺跡の今後の取り扱いについて緊急に協議を実施した。その結果、遺跡の現状保存は困難と判断されたため、埋蔵文化財センターが確認調査に引き続き本調査を実施して記録保存を図ることとなった。

平成9年度は確認調査の結果を受けた協議後、7月まで古墳時代・縄文時代早期・旧石器時代の文化層の一部を対象とした本調査を実施し、同年の11月から12月にかけて旧石器時代の文化層を対象とした本調査を実施した。

平成10年11月から12月にかけて、平成9年度に未調査のまま残っていた旧石器時代の文化層を対象とした本調査を実施した。

その後、土木部と文化財課が協議し、平成14年度に埋蔵文化財センターにおいて整理・報告書作成作業を実施した。

第2節 調査の組織

平成9年度(確認調査・本調査)

事業主体者	鹿児島県土木部道路維持課(指宿土木事務所)						
調査主体者	鹿児島県教育委員会						
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課						
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉	元	正	幸
	〃	次長兼総務課長		尾	崎		進
	〃	調査課長		戸	崎	勝	洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長		新	東	晃	一
調査担当者	〃	文化財主事		青	崎	和	憲
	〃	文化財研究員		栗	林	文	夫
	〃	文化財研究員		山	崎	克	之
	〃	文化財研究員		黒	川	忠	広
調査指導者	鹿児島大学法文学部	教	授	森	脇		広
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主	査	政	倉	孝	弘
	〃	主	事	追	立	ひとみ	

発掘作業員

粟元ツミ子, 永野テル子, 中道政子, 寺師範政, 寺師シツエ, 熊本育子
 浜田照良, 池上善也, 永野恵子, 鎮守ハツエ, 垂口トミ子, 赤崎フミ子
 松下勉, 弓指ハツエ, 弓指キミエ, 弓指シツ, 木佐貫アキエ, 弓指和子
 木佐貫咲子, 浜崎裕子, 横井シツエ, 野村一守, 坪口八重, 田中さとみ
 垂口久子, 弓指要子, 森川治子, 弓指米子, 中野昭子, 飯屋崎サダエ
 飯屋崎フヂ子, 小田ユミ, 田代守, 米倉ヨネ子

平成10年度(本調査)

事業主体者	鹿児島県土木部道路維持課 (指宿土木事務所)			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉 永 和 人
	"	次長兼総務課長		尾 崎 進
	"	調査課長		戸 崎 勝 洋
	"	課長補佐兼 第一調査係長		新 東 晃 一
	"	文化財主事		青 崎 和 憲
調査担当者	"	文化財研究員		黒 川 忠 広
	"	文化財研究員		桑 波 田 武 志
調査事務担当	"	主 査		政 倉 孝 弘
	"	主 査		前 屋 敷 裕 徳
	"	主 事		溜 池 佳 子

発掘作業員

赤崎フミ子, 池上善也, 上電フミエ, 大山良子, 小田ユミ, 鎌田ひとみ
 粟元ツミ子, 田中さとみ, 垂口トミ子, 垂口久子, 寺師範政, 寺師しづえ
 木佐貫アキエ, 中野昭子, 永野恵子, 永野テル子, 野村一守, 中道政子
 久津輪ミツ子, 永山昌子, 浜崎裕子, 横井シツエ, 弓指和子, 弓指シツ
 弓指知子, 弓指要子, 弓指米子, 立石礼子, 中村直美, 折笠和代

平成14年度(整理・報告書作成)

事業主体者	鹿児島県土木部道路維持課			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	井 上 明 文
	"	次長兼総務課長		田 中 文 雄
	"	調査課長		新 東 晃 一
	"	課長補佐		立 神 次 郎
	"	第一調査係長		池 畑 耕 一
	"	主任文化財主事		中 村 耕 治

調査担当者	文化財課兼鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	児玉健一郎
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	係長	前田昭信
	”	主査	栗山和己
整理作業員	網屋にしき、前田裕子、湯之上さきゆり		

第3節 調査の経過

調査の経過については、調査日誌から略述する。

平成9年度

4月21日(月)～4月25日(金)

調査用機材搬入。電話・水道の取り付け。第1～6トレンチ設定、重機により表土を除去した後、人力により掘り下げ。1トレンチⅢ層から縄文時代の土器片出土。2トレンチⅦ層(旧石器時代細石器文化時期)から黒曜石剥片出土。

4月30日(水)～5月2日(木)

各トレンチの掘り下げ。トレンチ位置図作成。1・2トレンチ遺物出土状況実測・写真撮影・遺物取り上げ。

5月6日(火)～5月9日(金)

1・2トレンチ拡張。1トレンチ拡張部より多量の土器片出土。調査用グリッド設定。2トレンチ拡張部のⅦ層から黒曜石剥片出土。7トレンチ設定・掘り下げ。Ⅴ層から縄文時代早期の石器出土。8トレンチ設定・掘り下げ。Ⅴ層から縄文時代早期の土器・石器出土。

5月12日(月)～5月16日(金)

9トレンチ設定・掘り下げ、土器片・黒曜石剥片出土。2トレンチ拡張部・4・7・8トレンチ掘り下げ。7トレンチから旧石器時代の黒曜石剥片出土。8トレンチから黒曜石剥片出土。2トレンチ拡張部から黒曜石核出土。2トレンチ拡張部・4トレンチ、遺物出土状況写真撮影・遺物取り上げ。6トレンチ土層断面図作成。9トレンチ遺物出土状況実測・写真撮影・遺物取り上げ。

5月19日(月)～5月22日(木)

1トレンチ拡張部・4トレンチ・7～9トレンチ掘り下げ。遺物出土状況写真撮影・遺物取り上げ。ベルトコンベアを設置し、古墳時代の遺物包含層掘り下げ。

5月26日(月)～5月29日(木)

古墳時代の遺物包含層掘り下げ。2基の土坑を検出し、写真撮影後に半裁。

6月2日(月)～6月6日(金)

古墳時代遺物包含層掘り下げ。遺物出土状況実測・写真撮影・遺物取り上げ。一部ではⅤ層(縄文時代早期遺物包含層)掘り下げ。

6月11日(火)～6月13日(金)

古墳時代遺物包含層掘り下げ。一部では縄文時代早期遺物包含層掘り下げ。石鏃・土器片等の遺物が出土。

6月16日(月)～6月20日(金)

縄文時代早期遺物包含層掘り下げ。遺物出土状況実測・写真撮影・遺物取り上げ。2トレンチⅨ層以下の深掘り着手。

6月23日(月)～6月27日(金)

縄文時代早期遺物包含層掘り下げ。2トレンチⅩ層を掘り下げたが、遺物や遺構が確認されなかったため調査を終了。

7月1日(火)～7月4日(金)

縄文時代早期遺物包含層掘り下げ。6トレンチⅩ層以下の深掘り着手。旧石器時代細石器文化層を千鳥格子状に掘り下げるために、2mメッシュを設置。

7月8日(火)～7月11日(金)

旧石器時代細石器文化層掘り下げ。遺物取り上げ。調査の前半終了。調査用機材の撤収。

11月4日(火)～11月6日(木)

調査用機材搬入。後半の調査開始。旧石器時代細石器文化層掘り下げ。

11月10日(月)～11月14日(金)

旧石器時代細石器文化層掘り下げ。

11月17日(月)～11月21日(金)

旧石器時代細石器文化層掘り下げ。旧石器時代ナイフ形石器文化層掘り下げ。

11月25日(火)～11月27日(木)

旧石器時代ナイフ形石器文化層掘り下げ。

12月1日(月)～12月5日(金)

旧石器時代細石器文化層掘り下げ。旧石器時代ナイフ形石器文化層掘り下げ。

12月8日(月)～12月10日(水)

旧石器時代ナイフ形石器文化層掘り下げ。土層確認のための重機を用いた深掘りを実施。土層断面撮影・断面図作成。調査終了。調査用機材の撤収。

平成10年度

11月9日(月)～11月13日(金)

調査用機材搬入。旧石器時代細石器文化遺物包含層(Ⅶ層)の掘り下げ。2m×2mの小グリッドを設定し、千鳥格子状に掘り下げて遺物集中部分を確認しながら調査を実施する。

11月16日(月)～11月18日(水)

先週に引き続き、Ⅶ層の掘り下げ。旧石器時代ナイフ形石器文化層(Ⅹ層)もⅦ層と同様に、2m×2mの小グリッドを設定して調査を実施。

11月24日(火)～11月26日(金)

Ⅶ層及びⅩ層の掘り下げ。

11月30日(月)～12月4日(金)

Ⅶ層及びⅩ層の掘り下げ・遺物取り上げ。

12月7日(月)～12月10日(木)

Ⅶ層及びⅩ層完掘。写真撮影を行い調査終了。調査用機材撤収。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 自然環境

喜入町は、九州の南端薩摩半島東部のほぼ中間に位置し、揖宿郡の最北部にあたる。北は鹿児島市、南は指宿市に接し、東は鹿児島湾を隔てて、大隅半島と相対し、西は知覧町、額娃町とそれぞれ接している。

町の東側にあたる海岸線はほとんど直線に近く、単調で、わずかに弧状に湾曲して約16kmに及んでいる。かつての海岸線は現在よりも東方に延びていたが、海水に浸食された結果、後退したものと思われる。

西部の地形は標高約500m程度の山塊で、薩摩半島を南北に走る南薩山地の一部であり、基盤岩の四万十累帯の上に阿多・入戸火砕流が順に重なっている。その傾斜は急で、西方山塊から多くの台地が東方に延びており、東原台地や有田原台地は、その先端が海岸に迫り、垂直に切り立ったシラスの崖が形成されている。このシラスは始良カルデラが形成される以前の始良火山から、約24,000年前に噴出した入戸火砕流が冷えて固まったものの総称である。

南薩山地に源を発する10余りの河川はいずれも短く、急傾斜のために上流では深い谷となり、下流ではわずかな沖積平野を形成しているにすぎない。喜入町内の遺跡の多くは、東部の階段状となった台地上や沖積地などに立地している。

町の年平均気温は17～18℃の温暖な気候で、鹿児島湾に注ぐ久津輪川下流一帯に自生する熱帯・亜熱帯植物のメヒルギ(リュウキュウコウガイ)は、最北限(北緯31度20分)の自生地として、大正10年(1921年)に天然記念物に指定されている。また、付近の前之浜地区の山林には主に熱帯・亜熱帯のシダ植物であるヘゴが自生していることが知られている。このような温暖な気候が、遺跡の立地に少なからず影響を与えたものと考えられる。

第2節 町内遺跡の考古学的研究の歴史

平成14年4月現在、喜入町内では83遺跡の所在が確認されている。町内遺跡の考古学的研究の歴史については「喜入町郷土誌」の中で河野治雄がまとめているので、引用しながら述べてみたい。

町内の遺跡に関する最も古い記録としては、昭和4年頃に山崎五十磨が、喜入村の中名や瀬々串に「弥生式土器」が出土することを報告したものである(「鹿児島県史跡・名勝・天然記念物報告書・史跡の部第二輯」)。山崎が報告した弥生土器がどのようなものであったか、遺物の所在を含めて不明である。瀬々串地区では、昭和59年から昭和62年にかけて農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、古墳時代の成川式土器等が出土しており、山崎が報告した弥生土器は成川式土器であった可能性が高い。

昭和18年には寺師見國が前之浜で縄文時代後期の市来式土器が出土することを報告している(「鹿児島県の遺跡地名表」)。

昭和26年に鹿児島大学の三友国五郎が県内の遺跡の一覧表(「鹿児島県考古学紀要」第一号)を作成し、瀬々串、中名、前之浜、宮地、一倉、鍋尾、生見田貫川、一倉鬼ヶ久保の7地域を紹介している。

一方、地元住民にも郷土史に興味を持つ者が現れた。その一人である川原熊五郎は瀬々串の各地から出土する土器や石器を精力的に収集し、収集品は今日の研究のための貴重な資料となった。

昭和26・27年頃、当時県立指宿高等学校に在職していた国分直一や重久重郎が郷土研究部を創設した。同研究部の活動によって遺跡や遺物に対する生徒の関心が高まるにつれ、新しい遺跡や遺物の発見が相次いで報告されるようになった。

昭和36年から県教育委員会が県内全域にわたる埋蔵文化財分布調査を実施した。喜入町では有村国雄や川原熊五郎などが協力者となり、その結果は昭和39年度に「鹿児島県文化財調査報告書第十一集別冊」の中で「鹿児島県遺跡地名表」として報告された。その後、県教育委員会は昭和48年度・昭和51年度に「鹿児島県市町村遺跡地名表」や「遺跡地図」を作成し、当時徐々に増加しつつあった大規模な農地開発事業との調整のための基礎資料となった。

町内における本格的な発掘調査は、昭和59年度から昭和62年度の4年間にわたって実施された県営特殊農地保全整備事業に伴う瀬々串地区の発掘調査である。これらの調査主体は町教育委員会で、調査そのものは県教育委員会が実施した。一連の調査では野畑遺跡・西船子遺跡・小六郎遺跡・段之原遺跡・下大原遺跡・松木田遺跡・永野遺跡の7遺跡について、確認調査や部分的な本調査が実施された。中でも注目されたのは、昭和62年の下大原遺跡の調査である。遺跡は標高60～90mのシラス台地上に立地する。確認調査では古墳時代の遺物や遺構が検出された。その後、設計変更による現状保存が不可能と判断された約850㎡を対象として本調査が実施された。本調査では古墳時代の遺物のほか、竪穴住居跡29基、貯蔵穴2基が検出された。住居跡の平面プランは方形がほとんどであったが、円形のプランに張り出しをもつ柄鏡形の住居跡が2基検出された。住居跡同士には切り合いをもって検出されたものがあり、一定期間定住していた状況が窺える。

平成5年度から平成10年度にかけて団体営農業基盤整備促進事業(帖地地区)に伴う帖地遺跡の発掘調査が町教育委員会によって実施された。同遺跡については、既に昭和30年代に縄文時代後期の指宿式土器・市来式土器や弥生時代の土器片が散布することが知られていた。確認調査では旧石器時代から平安時代にいたるまでの10時期の文化層の存在が明らかとなった。その後の協議で、設計変更による現状保存が不可能と判断された約10,900㎡を対象として本調査が実施された。

本調査の結果、大隅降下軽石層(約24,000年前)を挟んだ上下の層から旧石器時代ナイフ形石器文化時期の遺物が出土した。県内のほとんどの地域では始良火山から噴出した大隅降下軽石層・入戸火砕流・A-T火山灰層(いずれも約24,000年前)が厚いところでは100m以上も堆積しているために、これらの層より古い時期の文化層が調査された遺跡の数は限られており、同遺跡から得られた資料はきわめて貴重な資料となった。また、サツマ火山灰層(約11,500年前)の下の層からは神子柴系と思われる大型の石槍、局部磨製石斧、細石器、土器片、石鏃等が出土し、南九州における縄文時代草創期文化の新たな局面を示すものとして注目された。

アカホヤ火山灰(約6,400年前)の下の層からは、縄文時代早期の条痕文を施した土器に伴って、石槍、石核のほか帖地型と名付けられた長身の二等辺三角形の石鏃が多量に出土した。

そのほか、分布調査で採集されていた縄文時代後期の指宿式土器、松山式土器、市来式土器等も出土した。縄文時代後期の遺物では、4個体が「入れ子」状態で出土した松山式土器が注目される。

平成12年度には農道整備事業に伴って、町教育委員会が東郷坂A遺跡、東郷坂B遺跡、焼山遺跡、鍋

尾遺跡の確認調査と東郷坂B遺跡の本調査を実施した。東郷坂B遺跡から旧石器時代細石器文化時期の遺物が出土しただけで、ほかの3遺跡からは遺物の出土はなかった。

平成12年度から平成14年度の3年にわたって、県道知覧喜入線の改良工事に伴って県教育委員会が東郷坂A遺跡の本調査を実施し、旧石器時代細石器文化時期を中心とした遺物が出土した。

第3節 鍋尾遺跡の調査史

昭和26年に三友国五郎がまとめた県内遺跡の一覧表の中に、縄文時代後期の指宿式土器と市来式土器の出土地として「鍋尾」の地名が初めて現れる。ほぼ同じ頃、県立指宿高等学校に在職していた国分直一が鍋尾遺跡の調査を実施しているが、掘削を伴う調査なのか表面調査にとどまっていたのかわかるとは不明である。

昭和37年には河野治雄が現地踏査を行い、従来知られていた縄文時代後期の遺物以外に、縄文時代前期の曾畑式土器や弥生土器と思われる破片を採集している。

今回の発掘調査部分からは、縄文時代後期の遺物は出土しておらず、従来、遺物が採集された地点とは異なっているものと思われる。また、今回の調査では旧石器時代細石器文化時期・ナイフ形石器文化時期の遺物が出土し、本遺跡の文化はさらに遡ることが明らかとなった。

平成12年度に町教育委員会が農道整備事業に伴って実施した確認調査は、今回の調査地点より南側を対象としており、遺跡の端部にあたるためか遺物は出土していない。

第4節 鍋尾遺跡と周辺の遺跡

鍋尾遺跡は南北に延びる南麓山地の東側端部にあたる標高約180mの台地上に立地する。本遺跡の立地する付近は山地とシラス台地の境に相当し、東方向には緩やかな斜面のシラス台地が広がっている。町内の遺跡の多くが、山地を背後に控えたシラス台地上に集中する。本遺跡と同様な立地条件の遺跡としては、山中遺跡(66)、油木原遺跡(65)、焼山遺跡(58)、東郷坂A遺跡(56)、東郷坂B遺跡(57)、小松比良岡遺跡(64)、一倉鬼ヶ久保遺跡(12)、横井頭遺跡(61)などがあり、いずれも山地端部に沿って遺跡が立地している。これらの遺跡のうちで本調査などが実施され、遺物が確認されたのは東郷坂A遺跡(56)、東郷坂B遺跡(57)であり、両遺跡からは旧石器時代細石器文化時期の遺物が出土している。

引用・参考文献

- 1 「喜入町郷土誌」喜入町郷土誌編集委員会(河野治雄) 昭和56年
- 2 「野塚遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 喜入町教育委員会 1985年3月
- 3 「西船子遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 喜入町教育委員会 1986年3月
- 4 「小六郎遺跡・段之原遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 喜入町教育委員会 1987年3月
- 5 「下大原遺跡・松木田遺跡・永野遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 喜入町教育委員会 1998年3月
- 6 「粘地遺跡(縄文編)」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 喜入町教育委員会 1999年3月
- 7 「粘地遺跡(旧石器編)」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 喜入町教育委員会 2000年3月
- 8 「東郷坂B遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 喜入町教育委員会 2001年3月
- 9 「鹿児島サン・オーシャン・リゾート地域埋蔵文化財分布調査報告書(Ⅱ)」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(68) 鹿児島県教育委員会 1994年3月



第1図 鍋尾遺跡と周辺の遺跡

表1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	時代	遺物	文献等
1	鍋尾	一倉鍋尾字山神	山地	旧石器・縄文・古墳	細石刀・細石刀核・岩本式土器・石鏃・石斧	町郷土誌・指宿市誌・本報告書
2	淵田	喜入淵田9954	台地	縄文・弥生	石斧・蔽石・弥生土器	町郷土誌
5	瀬戸口	前之浜瀬戸口	台地	弥生	弥生土器	町郷土誌
7	外瀬山野	中名外瀬山野	台地	弥生(後)	石斧・弥生土器	町郷土誌
8	陳	喜入陳	台地	縄文・弥生	石鏃・石斧・弥生土器	町郷土誌
12	一倉鬼ヶ久保	一倉鬼ヶ久保	山地	弥生(後)・古墳	須恵器・土師器	町郷土誌
13	政崩	前之浜南政崩6.353	山地	縄文・弥生	磨製石斧	町郷土誌
18	麓	喜入麓	低地	弥生(後)		町郷土誌
19	西ノ原	喜入西ノ原	低地	弥生	磨製石斧	町郷土誌
20	旧麓	喜入旧麓	台地	弥生	磨製石斧	町郷土誌
21	鉄山尻	一倉鉄山尻	山地	縄文	縄文土器(曾煙式?)	町郷土誌
22	東原	前之浜東原	台地	弥生		町郷土誌
23	せとんくち	前之浜永山迫の辺	低地	弥生(後)	弥生土器	町郷土誌
24	川中	前之浜小村近	低地	古墳	成川式土器	町郷土誌
25	川上	前之浜小村近	低地	古墳	成川式土器	町郷土誌
26	前之浜	前之浜	低地	縄文・弥生(後)	市来式土器	町郷土誌
32	上ノ原	中名上ノ原	山地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	町郷土誌
33	不動院鶏頭山玉雲寺跡	喜入16,138	山麓緩斜面	近世		
34	給饗城跡	喜入7,926・7,924の8	丘陵	中世(鎌倉)		
35	琵琶山城跡	喜入高野	台地	中世		
37	上ノ原跡	喜入上ノ原	山地	中世		
39	肝付家飯屋跡	喜入6,993	低地	近世		
43	井穴洞窟	生見	山地	古墳		平成10年度 分布調査
44	白灰地窯跡	前之浜7,914	低地	近世		町郷土誌
46	刀匠玉置家累代の墓	喜入8,230	低地	近世		町郷土誌・町指定
47	上麓城跡	喜入上麓	丘陵	中世		
55	網屋城跡	前之浜滝山	山頂緩斜面	中世		
56	東郷坂A	喜入一倉	台地	旧石器	細石刀・細石刀核	平成12~14年度 本調査(県)
57	東郷坂B	喜入東郷坂	台地	旧石器・縄文(早)		平成12年度 本調査(町)
58	焼山	喜入焼山	台地	古墳		平成2年度 確認調査(遺物なし)
59	中座主	中名中座主ほか	台地	旧石器・古墳		平成10年度 確認・本調査
60	菅尾・比良	一倉菅尾・比良	不詳	不詳		平成4年度 分布調査
61	横井頭	一倉横井頭	丘陵	旧石器	スクレーパー・剥片	平成5年度 分布調査
62	陣ノ尾	一倉陣ノ尾・冷水ヶ谷西上原	台地	縄文(早)・古墳	剥片・成川式土器	平成11年度 確認・本調査
63	曲畑	一倉曲畑	河岸段丘	旧石器・古墳	スクレーパー・成川式土器	平成5年度 分布調査
64	小松比良岡	一倉小松比良岡	丘陵	縄文・古墳	縄文土器・成川式土器	平成5年度 分布調査
65	油木原	喜入油木原	丘陵	古墳	成川式土器	平成2年度 確認調査(遺物なし)
66	山中	喜入山中	丘陵	縄文・古墳	貝殻条痕文土器・成川式土器	平成5年度 分布調査
75	原之鼻	喜入前之鼻ほか	台地	古墳・中世	成川式土器・青磁	平成5年度 分布調査
76	上岡右エ門山野	前之浜上岡右エ門山野	台地	古墳・中世	成川式土器・土師器・青磁	平成5年度 分布調査
77	中和田ノ上	前之浜中和田ノ上	台地	古墳	成川式土器	平成5年度 分布調査
78	横迫	前之浜横迫	台地	古墳・中世	剥片・成川式土器	平成5年度 分布調査
79	鍋ノ駄床	前之浜鍋ノ駄床	丘陵	縄文・古墳	剥片・縄文土器・成川式土器	平成5年度 分布調査
80	中野原	前之浜中野原ほか	台地	古墳・古代	成川式土器・土師器	平成5年度 分布調査
81	美女ヶ谷	前之浜美女ヶ谷ほか	台地	古墳・古代	成川式土器・土師器・須恵器	平成5年度 分布調査
82	ツブシヶ原	前之浜ツブシヶ原	台地	古墳	成川式土器	平成5年度 分布調査
83	上茶荒松	一倉上茶荒松	台地	近世		

第3章 調査の概要

第1節 調査区の設定と調査方法

平成9年度

遺物包含層の有無とその範囲を把握するために事業予定地の地形を考慮しながら、任意の場所に8箇所のトレンチを設定した。トレンチの大きさは2m×6mを基本としたが、調査の途中で拡幅したり拡張したトレンチもある。調査の効率化を図るために表土を重機で除去した後、人力で慎重に掘り下げた。確認調査の期間は4月21日～7月11日(実働50日間)であった。



第2図 トレンチ配置図・グリッド設定図

確認調査では、3トレンチと5トレンチ以外のすべてのトレンチから旧石器時代細石器文化時期・縄文時代早期・古墳時代の遺物が出土した。また、6トレンチでは旧石器時代ナイフ形石器文化時期の遺物が出土した。4トレンチのⅦ層(旧石器時代細石器文化時期相当)からも黒曜石剥片が出土したが、トレンチを設定した場所は旧地形を復元するとかなりの斜面となることから、トレンチ東側から流れ込んだ遺物であると判断し、周辺一帯を本調査の対象部分から除外した。確認調査の実施面積は約220㎡であった。

以上のことから、遺物包含層が残存するのは第2図に示す範囲と想定した。

その後の遺跡の取り扱いに関する協議の結果、本調査を実施して記録保存を図ることとなった。本調査の実施にあたっては、道路工事事用センター杭№7と№8を結んだ線を基準軸とする10m四方のグリッド(調査用区画)を設定した。グリッドは北から南へA区～I区、西から東へ1区～13区と呼ぶこととし、ひとつのグリッドは、例えばA-1区というようにアルファベットと数字を組み合わせた呼称とした。

平成9年度の本調査は調査期間の関係上、E区～I区-11区～13区の約900㎡を調査対象として、11月4日～12月10日(実働24日間)に実施した。表土は重機で除去し、古墳時代の遺物包含層であるⅡ層から人力による掘り下げを実施し、遺物や遺構の把握に努めた。無遺物層であるⅣ層(アカホヤ火山灰)、Ⅵ層(サツマ火山灰)、Ⅷ層(大隅降下軽石)は重機で除去し、調査の効率化を図った。

また、Ⅷ層(旧石器時代細石器文化時期)の調査にあたっては、2m四方の小グリッドを設定した上で、千鳥格子状に掘り下げて遺物の分布状況を把握し、遺物の集中によってブロックとして捉えらるる部分は、随時拡張してブロック全体を調査した。

平成10年度

平成9年度の未調査部分を対象として11月9日～12月11日に本調査を実施した。調査の対象となったのは、D区～H区-7区～10区の約600㎡である。調査は平成9年度と同様の方法で実施した。

第2節 遺跡の層序

現況は畑地及び山林となっている。かつてはH-11区を中心とした小丘陵が存在していたものと思われるが、この小丘陵の北側半分は開墾されて畑地となっている。一帯の緩斜面のほとんどは畑地として利用するために削平され、畑間の段差が1mを越すような段々畑が広がっている。

2トレンチ及びE-11区～E-13区の土層を第3図に示した。2トレンチのⅡ層からⅣ層は耕作によってほとんど削平され、縄文時代早期の遺物包含層であるⅤ層も半分近く削平を受けている。また、土層全体が東から西に向かって傾斜しており、旧地形も同様な傾斜を持っていたことが推定される。E-11区～E-13区では、Ⅱ層のすべてとⅢ層のほとんどが削平されている。Ⅳ層以下はほぼ水平に堆積し、残存状況も良好であった。

複数のトレンチの土層断面から復元した標準的な層序は次のとおりである。

- | | |
|-------------|-------------------------------|
| I層：灰褐色土 | 現表土。 |
| II層：暗黄褐色土 | 古墳時代の遺物包含層である。残存している部分は少ない。 |
| III層：明黒褐色土 | 縄文時代前期の遺物をわずかに含んでいる。 |
| IV層：黄褐色火山灰層 | 約6,400年前に鬼界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰。 |
| V層：黄褐色土 | 縄文時代早期の遺物包含層。 |
| VI層：黄褐色火山灰層 | 約11,500年前に噴出したサツマ火山灰層。 |

VI層：黒褐色粘質土	通称チョコ層と呼ばれる粘質土。部分的に3層に細分が可能で、中間層は黒色が薄くなる。旧石器時代細石器文化時期の遺物包含層。
VII層：黄褐色火山灰層	約24,000年前に蛤良火山から噴出した大隅降下軽石層。
IX層：黒茶褐色粘質土	旧石器時代ナイフ形石器文化時期の遺物包含層。
X層：乳白色粘質土	礫を多く含む。基盤層。

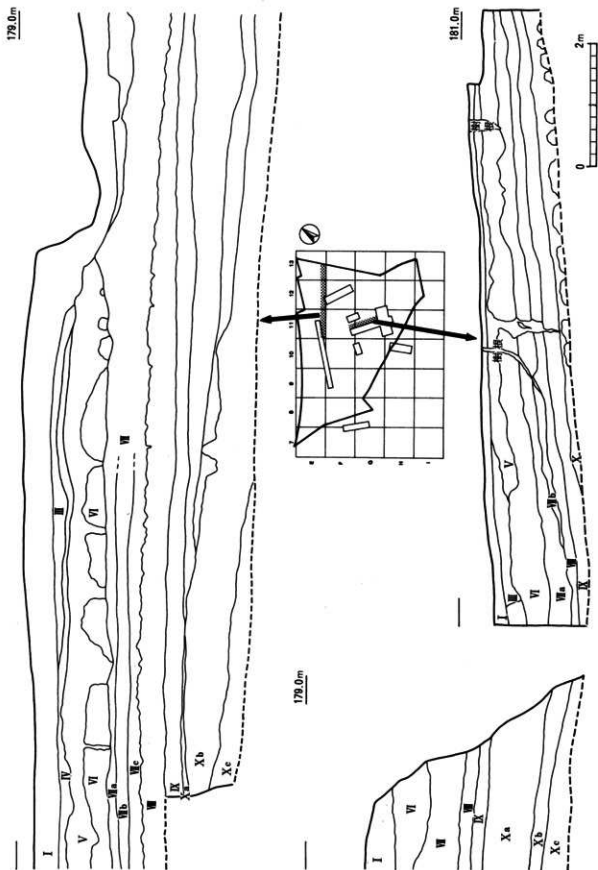
第3節 鍋尾遺跡の地層について

鹿児島大学法文学部教授 森 脇 広

遺跡内の堆積物、特に火山灰層の認定について指導した。ここには、上位から鬼界アカホヤ火山灰、桜島・薩摩テフラ、大隅降下軽石、唐山テフラ、鬼界葛原テフラの指標テフラが認められる。特にここで注目すべきは、大隅降下軽石の下の土壌から遺物が出土したことである。この場所は、比較的傾斜を持った丘陵状の地形となっているために、通常見られる厚い入戸火砕流は堆積しておらず、約40cmほどの薄い大隅降下軽石だけが認められ、旧石器の遺物発掘に好都合な場所である。試掘溝において、この下位の暗黒色の土壌層から「フレイク」が出土したことや、地形環境としても類似した立地場所にある近くの粘地遺跡では、大隅降下軽石の下の土壌層から集石遺構が見つかっていることなどは、本遺跡においてさらに良質な遺物が出土することの期待を抱かせる。

さらに、この遺物包含層の下位では固結した灰～褐色火山灰層が、厚いところで40cmほどの厚さで広く認めることができる。この固結火山灰層は、約3万年～5万年前の唐山テフラに対比されると考えられ、給源は大野岳と推定されるものである。この下位の角礫を含むローム質の土壌層も遺物包含の可能性を秘めた良好な地層である。種子島ではこの層準から石器が見いだされている。さらにこの下位には約10万年前の鬼界葛原火山灰も堆積している。

このように、ここには過去10万年間の良好な土壌と有益なテフラ層が5mほどの厚さの範囲の中に堆積しており、この文化層を見いだすには非常に好都合な場所と考える。後期～中期旧石器時代の良好な土壌層とテフラ層が適度の厚さで堆積するこうした場所での発掘例が南九州ではこれまで極めて少ないがゆえに、唐山テフラから下位の地層までも注意深い発掘調査を望みたい。この下位の地層について詳しい調査が不可能な場合でも、簡便ではあるが、多量の土壌を篩にかけることによって、文化遺物が見いだされるかも知れない。九州ではまだこの層準からの文化遺物が見いだされていない現状では、ここの遺跡の下位の地層の発掘は大きな意義があると考えられる。



第3図 遺跡の土層

第4章 調査の成果

第1節 概要

確認調査の結果、旧石器時代ナイフ形石器文化時期(Ⅸ層)・旧石器時代細石器文化時期(Ⅶ層)・縄文時代早期(Ⅴ層)・縄文時代前期(Ⅲ層)・古墳時代(Ⅱ層)の複合遺跡であることがわかった。

旧石器時代ナイフ形石器文化時期の遺物は22点であった。剥片及びチップが主体で、ツールは含まれていない。剥片のほとんどがローリングを受けていることから、出土位置は原位置ではないと推定される。遺構は検出されなかった。

旧石器時代細石器文化時期の遺物は集中して出土する部分が認められ、いくつかのブロックを形成していることがわかった。ただし、遺物の主体は小剥片及びチップであり、細石刃や細石刃核の点数は少ない。遺構は検出されなかった。

縄文時代早期の遺物は土器片及び石器である。土器片の数量は少なく、完形に復元できる個体はなかったが、個体数としては2～3点程度であろうと思われる。土器型式としては、円筒形土器の岩本土器だけであった。石器では石鏃や石斧が出土した。遺構は検出されなかった。

縄文時代前期の遺物はわずか5点の土器だけである。本来の遺物包含層はⅢ層であるが、Ⅱ層やⅤ層から出土したものもある。

古墳時代の遺物包含層は削平されている部分が多く、包含層から出土した遺物量は少なかった。成川式土器と呼ばれる甕形土器や壺形土器が出土した。遺構としては土坑1基が検出された。

第2節 整理作業の概要

1 石器について

当遺跡からは、旧石器時代・縄文時代早期・縄文時代前期の石器が出土している。

まず、各時代・各時期ごとに石器の器種分類を行い、報告書に掲載する遺物を抽出した。石器の時代・時期の特定は出土層位を基本としたが、後世の人為的な攪乱や何らかの原因によって移動した結果、出土層位と時代・時期が明らかに異なっているものも見られた。これらについては、出土層位に関係なく本来所属すると推定される時代・時期の項で取り扱った。遺物取り上げ時の層位認定の誤りの可能性のある石器については、出土層を所属文化層として取り扱ったが、本文中にその旨を記載した。

Ⅱ層とⅤ層からは縄文時代前期の土器がわずかに出土している。これらは本来の遺物包含層であるⅢ層から移動したものと考えられ、両層から出土した石器の中にも当然前期の遺物包含層から移動したものが存在すると推測される。しかし、文様や調整をもとにして所属時期を特定できる土器とは異なり、石器の所属時期の特定は困難だった。そこで、これらの石器は便宜的に縄文時代早期の石器として取り扱った。

次に各時代・各時期ごとの石器の石材を、肉眼観察によって分類した。石器の石材は多様にわたっており、時代をこえて共通するものがあるので、ここでまとめて説明する。

黒曜石A 光にかざすと青～灰色に濁っている。うっすらと縞状の部分が見られるが、基本的には不透明で、ゴマ状の不純物を含む。旧石器時代細石器文化時期に多用されている。鹿児島市竜ヶ水産の

黒曜石だと思われる。

黒曜石B 光にかざすと透明で赤みがかかる。少量の不純物を含んでいる。鹿児島市奄ヶ水産の黒曜石だと思われる。

黒曜石C 黒色の部分と透明な部分が縞状に見られる。少量の不純物を含む。

黒曜石D 黒色不透明でガラス質の光沢がある。少量の不純物を含む。

黒曜石E 黒色不透明で表面は風化し、ガラス質の光沢は見られない。樋脇町上牛鼻産の黒曜石に類似する。

黒曜石F 光にかざすと透明で赤みがかかる。不純物は含まない。黒曜石Bに類似する。

黒曜石G 光にかざすと透明でやや青みがかかる。不純物は含まない。黒曜石Aに類似する。

黒曜石H 光にかざすと灰～茶色がかかり、半透明で曇っている。黒い粒子の不純物を含んでいる。

黒曜石I 不透明で、ゴマ状の不純物を含む。表面は風化し、くすんでいる。

黒曜石J 光にかざすと青灰色だが、不透明。ガラス質光沢があり、不純物を含まない良質の黒曜石。

黒曜石K 暗灰色を呈し、不透明で不純物を含まない良質の黒曜石。

頁岩 内面が黒色を呈する。緻密で固い。

チャート 旧石器時代細石器文化時代の石材は茶色を呈する。

瑪瑙 白色～オレンジ色を呈する。

水晶 透明で良質なものと白色で濁っているものが見られる。旧石器時代細石器文化時代に使用された石材である。

蛋白石 白色不透明である。

流紋岩 縄文時代早期に属する石鏃2点だけに使用されている。

粘板岩 縄文時代早期に属する剥片が3点出土した。

砂岩 縄文時代早期に属する石斧や剥片が出土した。

安山岩 鉱物結晶の発達した安山岩である。

器種分類と石材分類が終了後、各時代・時期の石材別点数一覧表及び石材別重量一覧表を作成し、併せて石材別点数比率と石材別重量比率を算出した。遺物の出土状況については、必要と思われる遺物分布図を作成した。詳細は各時代・時期の調査成果の項で説明する。

2 土器について

石器と同様に時代・時期の特定は出土層位を基本としたが、後世の人為的な攪乱や何らかの原因によって移動した結果、出土層位と時代・時期が明らかに異なっている土器も見られた。これらについては、文様・調整を目安にして本来所属する時代・時期を特定した。

次に各時代・時期ごとに接合を試みたが、完形に復元できた資料はなかった。古墳時代の土器では、表層出土の資料と包含層出土の資料が接合した個体があり、表層中の遺物の移動はさほど大きくないようである。

接合終了後、報告書に掲載する遺物の抽出を行い、各時代・時期ごとに出土点数・重量を算出し、出土土器組成表としてまとめた。また、土器の出土状況については、必要と思われる分布図を作成した。詳細は各時代・時期の調査成果の項で説明する。

第3節 旧石器時代ナイフ形石器文化時期(Ⅸ層)の調査

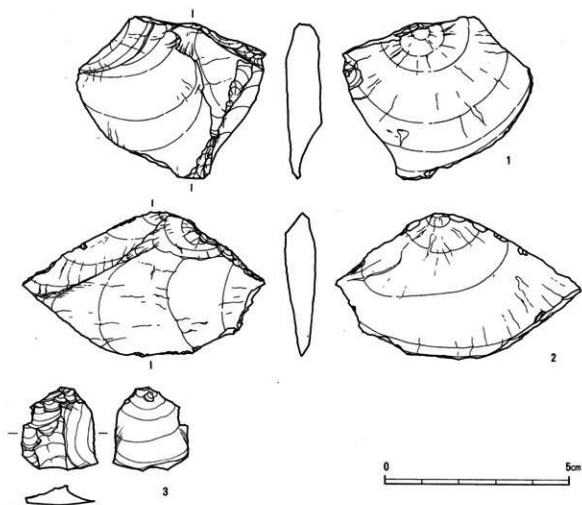
1 出土遺物の概要(表2・表3・第5図)

出土石器総数はわずかに22点である。これらのほとんどがローリングを受けており、原位置の遺物はほとんど存在しないものと思われる。石器の内容はチップ及び剥片だけで、ツールは1点も出土していない。

石材は、黒曜石(チップ6点・剥片13点)、頁岩(剥片7点)、チャート(剥片1点)、瑪瑙(剥片1点)である。黒曜石の総重量はわずかに8.17gで、Ⅸ層から出土した石材総重量76.33gの10.7%をしめるにすぎない。剥片は小さく、Ⅶ層の石質と共通するものが見られることから、上層から混入した遺物である可能性が大きい。頁岩剥片は7点(31.8%)出土した。7点のうち1点は表土からの出土である。これらは同質の頁岩であり、Ⅶ層から出土した頁岩剥片とは石質が異なっている。重量比では全体の78.8%をしめている。

2 遺物(第4図1~3)

1と2は頁岩の剥片である。1は本来の遺物包含層であるⅨ層から出土した。幅広の不定形剥片である。特に使用痕らしきものは確認できない。長さ4.2cm、幅5.0cm、厚さ1.1cm、重さ23gである。



第4図 ナイフ形石器文化時期の石器



第5図 ナイフ形石器文化時期の石器出土状況

2は表層から出土したが、石質が1と共通することから同時期の遺物であると推定した。菱形に近い横長剥片である。背面下端に使用痕と思われる微細な連続した剥離が観察される。長さ3.9cm、幅6.6cm、厚さ0.9cm、重さ19gである。3はチャートの剥片である。I区層から出土した。背面右側縁部に使用痕と思われる微細な連続した剥離が観察される。長さ2.3cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重さ3.02gである。

表2 ナイフ形石器文化時期石材別点数一覧表

種別	石材	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石D	黒曜石F	黒曜石G	頁岩	チャート	瑪瑙	合計
チップ	点数	2			2		2				6
	比率(%)	9.1			9.1		9.1				27.3
剥片	点数	1	2	1	1	1	1	5		1	13
	比率(%)	4.5	9.1	4.5	4.5	4.5	4.5	22.7		4.5	59.0
使用痕のある剥片	点数							2	1		3
	比率(%)							9.1	4.5		13.7
合計	点数	3	2	1	3	1	3	7	1	1	22
	比率(%)	13.6	9.1	4.5	13.6	4.5	13.6	31.8	4.5	4.5	100

表3 ナイフ形石器文化時期石材別重量一覧表

種別	石材	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石D	黒曜石F	黒曜石G	頁岩	チャート	瑪瑙	合計
チップ	重量	0.31			0.36		0.29				0.95
	比率(%)	0.4			0.5		0.3				1.2
剥片	重量	0.23	0.59	0.84	2.09	2.74	0.73	17.93		4.97	30.12
	比率(%)	0.3	0.8	1.1	2.7	3.6	1.0	23.5		6.5	39.5
使用痕のある剥片	重量							42.24	3.02		45.26
	比率(%)							55.3	4.0		59.3
合計	重量	0.54	0.59	0.84	2.44	2.74	1.02	60.17	3.02	4.97	76.33
	比率(%)	0.7	0.8	1.1	3.2	3.6	1.4	78.8	4.0	6.5	100

第4節 旧石器時代細石器文化時期(VII層)の調査

1 出土遺物の概要(表4・表5)

出土遺物総数は656点である。チップ368点(56.1%)と剥片264点(40.2%)の合計が632点(96.3%)と出土遺物の大多数を占めている。二次的加工品としては、細石刃14点(2.1%)、細石刃核8点(1.2%)、石核1点(0.2%)、スクレーパー1点(0.2%)が出土した。他遺跡では石器組成に含まれることのある使用痕のある大型剥片類は出土していないが、頁岩の剥片が19点出土しており、これらがスクレーパー等の素材剥片獲得に伴うものであろうと考えられる。

出土石材の総重量は542.79gである。石材別では黒曜石Aが144.43g(26.6%)、頁岩が144.59g(26.6%)となっており、これらの合計が289.02gで全体の53%を超えている。この数値は、黒曜石Aが細石器の石材の主体であり、頁岩が剥片石器の石材の主体であったことを反映していると推測される。

細石刃核8点の石材は、黒曜石Aが3点(0.5%)、黒曜石Fが2点(0.3%)、黒曜石Gが1点(0.2%)、黒曜石Hが1点(0.2%)、水晶が1点(0.2%)となっている。県内の遺跡でも水晶を素材とする細石刃核の出土例があるが、出土した細石刃核全体に占める割合は低く、素材の主体とはなっていない。素材獲得上の問題、二次的な加工上の困難性等がその原因と考えられる。

細石刃核から剥出された細石刃は14点出土している。石材の内訳は黒曜石Aが6点(0.9%)、黒曜石Bが1点(0.2%)、黒曜石Cが1点(0.2%)、黒曜石Fが3点(0.5%)、黒曜石Gが3点(0.5%)となっている。

細石刃と細石刃核の石材別の相関関係をみてみると、細石刃と細石刃核の双方が出土しているのが黒曜石A、黒曜石F、黒曜石Gで、細石刃のみ出土しているのが黒曜石B、黒曜石Cで、細石刃核のみ出土しているのが黒曜石Hと水晶となっており、細石刃と細石刃核の石材が必ずしも対応していない状況がみられる。

2 各ブロックの状況

遺物の集中が確認される部分をA～Fまでの6つのブロックとして捉えた。

(1) Aブロック

ア 遺物の出土状況(表6・表7・第6図)

E-8区からE-9区にまたがる長径約10m×短径約6mの楕円形のブロックである。総数で120点の遺物が出土した。石材別組成では黒曜石が102点と圧倒的に多いが、水晶製の細石刃核1点・剥片8点が出土している点が注目される。

石器の器種別の組成はチップ64点、剥片47点、細石刃5点、細石刃核4点となっている。チップと剥片の合計は111点で、Aブロックの出土点数の90%を超える。また、遺跡全体の3分の1の細石刃と半数の細石刃核が本ブロックから出土している。

イ 遺物(第7図4～7・12～16・26, 第8図27～30・41・43)

細石刃核(4～7) 4の石材は不純物を含まない良質の黒曜石Fである。左側面及び背面に自然面が残されており、母岩は小さな角礫であったと推定される。作業面と打面の成す角度は約50度と、鋭

表4 細石器文化時期石材別点数一覧表

種別	石材	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石D	黒曜石E	黒曜石F	黒曜石G	黒曜石H	黒曜石I	黒曜石K	頁岩	チャート	黒曜	水晶	蛋白石	合計
チップ	点数	165	74	74	22	11	7	7				2	1	2	3		368
	比率(%)	25.2	11.3	11.3	3.4	1.7	1.1	1.1				0.3	0.2	0.3	0.5		56.1
剥片	点数	97	31	29	11	29	6	7	2	1		19	8	11	9	4	264
	比率(%)	14.8	4.7	4.4	1.7	4.4	0.9	1.1	0.3	0.2		2.9	1.2	1.7	1.4	0.6	40.2
細石刃	点数	6	1	1			3	3									14
	比率(%)	0.9	0.2	0.2			0.5	0.5									2.1
細石刃核	点数	3					2	1	1				(1)		1		8(1)
	比率(%)	0.5					0.3	0.2	0.2				0.2		0.2		1.4
スクレーパー	点数										1						1
	比率(%)										0.2						0.2
合計	点数	271	106	104	33	40	18	18	3	1	1	21	10	13	13	4	656
	比率(%)	41.4	16.2	15.9	5.0	6.1	2.7	2.7	0.5	0.2	0.2	3.2	1.5	2.0	2.0	0.6	100

(1) は石核で外数

表5 細石器文化時期石材別重量一覧表

種別	石材	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石D	黒曜石E	黒曜石F	黒曜石G	黒曜石H	黒曜石I	黒曜石K	頁岩	チャート	黒曜	水晶	蛋白石	合計
チップ	重量	24.57	12.72	9.4	4.53	1.07	0.64	0.48				0.17	0.04	0.17	0.09		53.88
	比率(%)	4.5	2.3	1.7	0.8	0.2	0.1	0.1									
剥片	重量	94.73	29.33	14.16	14.52	29.31	1.51	6.06	0.86	1.52		144.4	21.4	16.88	31.67	14.7	421.1
	比率(%)	17.5	5.4	2.6	2.7	5.4	0.3	1.1	0.1	0.3		26.6	3.9	3.1	5.8	2.7	77.6
細石刃	重量	0.78	0.08	0.06			0.32	0.35									1.59
	比率(%)	0.1					0.1	0.1									0.29
細石刃核	重量	24.35					4.92	2.26	2.15				23.74		5.34		62.76
	比率(%)	4.5					0.9	0.4	0.4				4.4		1.0		11.6
スクレーパー	重量										3.49						3.49
	比率(%)										0.6						0.6
合計	重量	144.4	42.13	23.62	19.05	30.38	7.39	9.15	3.01	1.52	3.49	144.6	45.18	17.05	37.1	14.7	542.8
	比率(%)	26.6	7.8	4.4	3.5	5.6	1.4	1.7	0.6	0.3	0.6	26.6	8.3	3.1	6.8	2.7	100

角である。作業面の中央部から右寄りにある、幅約8mmの縦長の剥離が最終剥離面である。細石刃剥離作業が進んだ結果、作業面が平坦化してしまった残核である。5の石材は不純物を含まない良質の黒曜石Fである。左側面の一部に自然面が残されており、母岩は小さかったと推定される。作業面全体にわたる幅約10mmの大きな剥離が最終剥離面である。4と同様に作業面が平坦化した残核である。6の石材は水晶である。左側面は曲面的な自然面であり、正六角柱形の結晶がうまく発達しなかった水晶が素材だと思われる。作業面に2枚の短い剥離が観察できる。いずれの剥離も途中でステップ

表6 ブロック別石材組成表

ブロック	石材	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石D	黒曜石E	黒曜石F	黒曜石G	黒曜石H	黒曜石I	黒曜石K	頁岩	チャート	珪瑯	水晶	蛋白石	合計	
A	点数	35	16	10	14	8	14	4	1				6			9	3	120
	比率(%)	29.2	13.2	8.3	11.7	6.7	11.7	3.3	0.8				5.0			7.5	2.5	100
B	点数	35	11	9	9	7	3	3					3			2	1	83
	比率(%)	42.2	13.3	10.8	10.8	8.4	3.6	3.6					3.6			2.4	1.3	100
C	点数	97	34	46		4		3	2				1	7	11			205
	比率(%)	47.3	16.6	22.4		2.0		1.5	1.0				0.5	3.4	5.4			100
D	点数	8	6	6				1										21
	比率(%)	38	28.6	28.6				4.8										100
E	点数	20	10	13	2	3			1									49
	比率(%)	40.9	20.4	26.5	4.1	6.1			2.0									100
F	点数	37	14	4	3	13		1			1	1	1					75
	比率(%)	66.7	18.7	5.3	4.0	17.3		1.3			1.3	1.3	1.3					100
ブロック外	点数	37	15	16	5	5		6		1		10	2	2	2			101
	比率(%)	36.6	14.9	15.8	5.0	5.0		5.9		1.0		9.9	2.0	2.0	2.0			100
表層出土	点数	2																2
	比率(%)	100																100
合計	点数	271	106	104	33	40	18	18	3	1	1	21	10	13	13	4		656
	比率(%)	41.3	16.2	15.9	5.0	6.1	2.7	2.7	0.5	0.2	0.2	3.2	1.5	2.0	2.0	0.6		100

表7 ブロック別石器組成表

ブロック	器種	チップ	剥片	使用痕のある剥片	二次加工のある剥片	石核	細石刃	細石刃核	スクレーパー	合計
A	点数	64	46		1		5	4		120
	比率(%)	53.3	38.4		0.8		4.2	3.3		100
B	点数	44	34		1		2	2		83
	比率(%)	53.0	40.0		1.2		2.4	2.4		100
C	点数	119	82	1		1	2			205
	比率(%)	58.0	39.0	0.5		0.5	1.0			100
D	点数	19	2							21
	比率(%)	90.5	9.5							100
E	点数	42	6				1			49
	比率(%)	85.7	12.2				2.1			100
F	点数	35	37				2		1	75
	比率(%)	46.7	49.3				2.7		1.3	100
ブロック外	点数	45	54				2			101
	比率(%)	44.5	53.5				2.0			100
表層出土	点数							2		2
	比率(%)							100		100
合計	点数	368	261	1	2	1	14	8	1	656
	比率(%)	56.1	39.8	0.2	0.3	0.2	2.1	1.2	0.2	100



第6図 細石器文化時期の石器出土状況

してしまい、石核の下端まで届いていない。細石刃剥離作業がうまくいかなかったために、作業を放棄した残核であろう。7の石材は黒曜石Fである。左側面と背面に自然面が残されており、4と同様に母岩は小さな角礫であったと推定される。残された作業面幅は9mmと狭小で、最終剥離面は中央から右下方に向かう短い剥離である。作業面中央には作業面再生を目的としたと思われる大きな剥離面が半分だけ観察される。このことから、作業面再生を試みたものの石核自体が半分に割れてしまったことが推測される。

細石刃(12~16) 12の石材は黒曜石Fである。断面形状は三角形で、尾部が欠損する。13の石材も黒曜石Fである。尾部と頭部の一部が欠損する。14の石材は黒曜石Aである。頭部と尾部を欠く。15の石材は黒曜石Gである。断面形状は台形で、頭部と尾部を欠いている。両側縁に使用痕と思われる微細な刃こぼれが観察される。16の石材は黒曜石Bである。頭部と尾部を欠いている。

作業面調整剥片(26~30) 細石刃核の作業面調整に伴う縦長の剥片である。26の石材は黒曜石Fである。断面形状は台形で、尾部を大きく欠いている。27の石材は黒曜石Gである。断面形状は台形で、頭部と尾部を欠いている。28の石材は黒曜石Fである。断面形状は三角形で、尾部を欠いている。背面には上方からの剥離面のほか、左方向からの2枚の剥離面が観察される。29の石材は黒曜石Fである。背面左半分に自然面が残されている。30の石材は黒曜石Gである。断面形状は台形で、厚さは2mmと、かなり厚い剥片である。

使用痕のある剥片(40) 石材は頁岩で、背面に大きく自然面が残された縦長の剥片である。断面形状は三角形で、右側縁に使用痕と思われる微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。

二次加工のある剥片(43) 蛋白石が素材の不定形剥片である。背面中央部には自然面が残されている。右側縁部に1枚の大きな剥離と複数の小さな剥離が施されている。

(2) Bブロック

ア 遺物の出土状況(表6・表7・第6図)

F-8区北側隅の長径約6m×短径約4mの楕円形のブロックである。総数で83点の遺物が出土した。石材別組成は隣接するAブロックに類似し、黒曜石が77点(92.8%)と圧倒的に多い。

器種別の組成はチップ44点、剥片35点、細石刃2点、細石刃核2点となっている。チップと剥片の合計は79点で、Bブロックからの出土点数の95%を超える。

イ 遺物(第7図8・9・17・18, 第8図31・32・38・44)

細石刃核(8・9) 8の石材は不純物を含む黒曜石Aである。最終剥離面は作業面中央の、長さ5mm程度の短い剥離面である。最終剥離に先立つ剥離面として、幅広の2枚の剥離が観察される。これらの剥離は作業面再生が目的だと推定され、作業面再生を試みたが、石質が悪いために途中で放棄された残核であろう。9の石材は黒曜石Gである。最終剥離面は作業面中央部の縦長の剥離で、下端まで到達している。左右側面、背面、打面に自然面が残されており、母岩は小さな角礫であったと推定される。左右側面に自然面が残っていることから、作業面幅は当初から現在の13mm程度の狭いものだったと思われる。

細石刃(17・18) 17の石材は黒曜石Fである。断面形状は三角形で、尾部を欠いている。18の石材は黒曜石Gである。背面の左側に自然面が残っている。断面形状は台形で、頭部と尾部を欠いている。

作業面調整剥片(31・32) 細石刃核の作業面調整に伴う縦長の剥片である。31の石材は黒曜石Eである。長さは9mmと短いが、完形の剥片である。32の石材も黒曜石Eである。背面の左側に自然面が残っている。頭部と尾部を欠いている。

二次加工のある剥片(38) 石材は黒曜石Eで、断面三角形の縦長剥片が素材である。背面には自然面が残される。一見すると小型ナイフのように見えるが、左右側縁部には、腹面からの刃つぶし状の複数の剥離が加えられており、有効なナイフエッジは認められない。ドリルの可能性が考えられる。

使用痕のある剥片(44) 石材は頁岩で、上下に自然面を残す方形の剥片である。節理面で割れた板状の石核から得られたものである。左右側縁部に微細な刃こぼれ状の使用痕が観察される。

(3) Cブロック

ア 遺物の出土状況(表6・表7・第6図)

F-8区・F-9区・G-8区・G-9区にまたがる直径約9mの円形のブロックである。6つのブロックの中では最も多い205点の遺物が出土した。石材別組成では黒曜石が186点(90.8%)となっている。ほかのブロックでは出土していない、瑪瑙のチップ・剥片が11点出土している。また、VII層から出土したチャート製の遺物10点のうち7点が本ブロックから出土している。

器種別の組成はチップ119点、剥片83点、細石刃2点、石核1点となっている。チップと剥片の合計は202点で、Cブロックからの出土点数の98%を超えている。細石刃は黒曜石製であり、瑪瑙製やチャート製の細石刃や細石刃核は出土していない。

イ 遺物(第6図19・20、第8図33・37・40・42)

細石刃(19・20) 19の石材は黒曜石Aである。断面形状は三角形で、頭部の一部と尾部を欠いている。20の石材も黒曜石Aである。断面形状が台形の、幅広の細石刃の頭部である。

作業面調整剥片(33) 細石刃核の作業面調整に伴う縦長の剥片である。石材は黒曜石Cである。断面形状は台形で、尾部を欠いている。

作業面調整剥片(37) 石材は瑪瑙である。断面形状が三角形の縦長の剥片で、細石刃核の作業面調整剥片のようにも思われる。しかし、先述したように瑪瑙製の細石刃核や細石刃は出土していない。細石刃核調整剥片に比較すると大型であることから、位置づけが困難な資料である。

使用痕のある剥片(40) 瑪瑙製の幅広剥片である。腹面の左下方に背面方向から加えられた力によって生じた微細な剥離の連続が観察される。

石核(42) 石材は赤茶色のチャートである。作業面に残された剥離面から判断すると、不定形剥片を求心的に剥出したものと思われる。得られた剥片を素材にしたツールが出土していないために剥片剥離の目的は不明である。

(4) Dブロック

ア 遺物の出土状況(表6・表7・第6図)

6つのブロックの中では最小で、G-10区北側に、長径6m×短径4mの範囲に広がっている。総数で21点の遺物が出土した。石材は黒曜石のみである。

器種別の組成はチップ19点と剥片2点だけであり、二次的な加工品は出土していない。

イ 遺物(第8図34)

作業面調整剥片(34) 細石刃核の作業面調整に伴う縦長の剥片である。石材は黒曜石Cである。断面形状は三角形で、尾部を欠いている。

(5) Eブロック

ア 遺物の出土状況(表6・表7・第6図)

G-10区とG-11区にまたがって、直径約7mの範囲に広がる比較的小さなブロックである。総数で49点出土した遺物のすべてが黒曜石製である。

器種別の内訳はチップ42点、剥片2点、細石刃1点となっている。

イ 遺物(第7図21)

細石刃(21) 石材は黒曜石Cである。断面形状は三角形で、尾部を欠いている。背面には下方からの剥離面が残されており、細石刃剥離作業開始直後の細石刃であると思われる。

(6) Fブロック

ア 遺物の出土状況(表6・表7・第6図)

G-11区・G-12区・H-11区・H-12区にまたがって、直径11mの範囲に広がる大きなブロックである。出土遺物の総数は75点で、石材別組成は黒曜石が73点(97.3%)、頁岩1点(1.4%)、チャート1点(1.4%)となっている。

器種別の内訳はチップ35点(46.7%)、剥片37点(49.3%)、細石刃2点(2.7%)、スクレーパー1点(1.4%)となっている。

イ 遺物(第7図22・23, 第8図35・36・39)

細石刃(22・23) 22の石材は黒曜石Aである。断面形状は台形で、頭部を斜めに欠いている。23の石材も黒曜石Aである。断面形状は台形で、幅広の細石刃の頭部である。

作業面調整剥片(35・36) 細石刃核の作業面調整に伴う縦長の剥片である。35の石材は黒曜石Aで、断面形状は三角形である。36の石材も黒曜石Aで、断面形状が台形の幅広の剥片である。

スクレーパー(39) 黒曜石Kの剥片を素材とする。背面には自然面が残されている。背面と腹面の両方からの小剥離により、剥片上部を中心にエッジが形成される。Ⅶ層から出土したということで、細石器文化時期の遺物として取り扱ったが、以下の理由により縄文時代早期の遺物である可能性が高い。①黒曜石Kを石材とする石器は、剥片やチップを含めてこのスクレーパー以外に存在しない。②縄文時代早期の石鏃(第11図58)と石鏃未製品(第11図63)が黒曜石Kを石材としている。③縄文時代の石器である石鏃をⅦ層の出土遺物として取り上げたものが2点(第11図57・61)ある。④土層断面図(第3図)からわかるとおり、縄文時代早期と細石器文化時期の間層であるⅥ層(サツマ火山灰層)の堆積は、ブロック状となっている場所があり、完全にⅦ層を覆っているわけではない。したがって、本来はⅤ層にあった縄文時代早期のスクレーパーがⅥ層の隙間からⅦ層に落ち込んだものと考えられる。

(7) ブロック外

ア 遺物の出土状況(表6・表7・第6図)

調査区全体にわたって点在し、ブロックとしてのまとまりが認められなかった遺物である。ここでとりあげた遺物の総数は101点である。石材別組成は黒曜石が85点(84.2%)で最も多く、組成状況はAブロックやBブロックの状況に類似する。頁岩の剥片類は、遺跡全体で21点が出土しているが、全体の半数近い10点はブロック外から出土している。

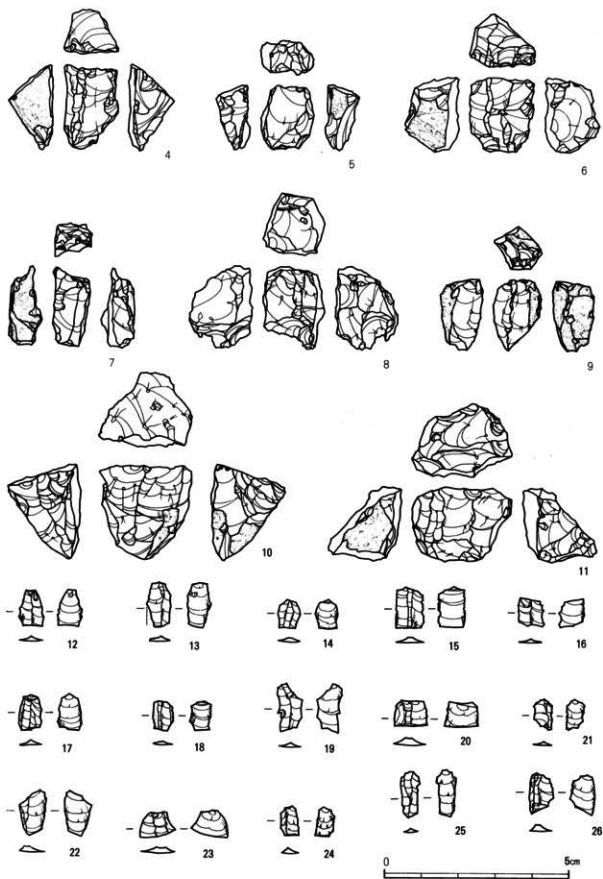
器種別の内訳はチップ45点(44.6%)、剥片54点(53.5%)、細石刃2点(2%)となっている。

イ 遺物(第7図24・25)

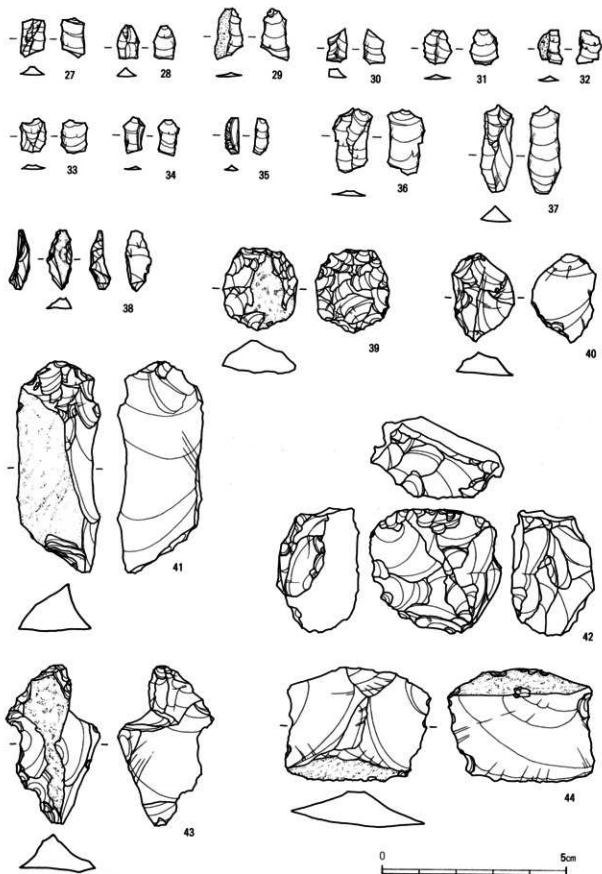
細石刃(24・25) 24の石材は黒曜石Aである。断面形状は三角形で、尾部を欠いている。25の石材は黒曜石Gである。断面形状は三角形である。

(8) 表層出土遺物

表層から出土し、出土位置が特定できない細石刃核が2点ある。



第7図 細石器文化時期の石器（1）



第8図 細石器文化時期の石器（2）

細石刃核(第7図10・11) いずれも石材は黒曜石Aである。10の左側面及び背面の一部に自然面が残される。母岩の分割面をそのまま打面として使用している。最終剥離面は中央より右側の大きな剥離面である。細石刃剥離に伴うような幅の狭い縦長の剥離面は残されていない。作業面再生作業途中の細石刃核だと思われる。11の左側面の一部には自然面が残されている。10と同様に作業面再生作業途中の細石刃核だと思われる。

表8 細石器文化時期の石器観察表

採回番号	番号	器種	出土区	プロック	層	取上番号	標高(m)	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	観察所見
第7	4	細石刃核	E-8	A	VII	112	176.88	黒曜石F	2.3	1.5	1.2	3.12	左側面に自然面を残す
	5	細石刃核	E-8	A	VII	109	176.94	黒曜石H	1.7	1.4	0.9	2.15	右側面の一部に自然面を残す
	6	細石刃核	E-9	A	VII	43	177.14	水晶	2.0	1.8	1.5	5.34	左側面に自然面を残す
	7	細石刃核	E-8	A	VII	222	176.71	黒曜石F	2.2	1.0	0.9	1.8	左側面に自然面を残す
	8	細石刃核	F-8	B	VII	233	176.33	黒曜石A	2.2	1.7	1.7	5.94	
	9	細石刃核	F-8	B	VII	188	176.37	黒曜石G	1.9	1.3	1.2	2.26	右側面に自然面を残す
	10	細石刃核	不明	不明	表層	無し	不明	黒曜石A	2.5	2.5	2.0	9.88	右側面の一部に自然面を残す
	11	細石刃核	不明	不明	表層	無し	不明	黒曜石A	2.0	2.7	2.0	8.53	左側面の一部に自然面を残す
	12	細石刃	E-9	A	VII	79	177.06	黒曜石F	0.9	0.8	0.1	0.1	端部欠損
	13	細石刃	E-9	A	VI	106	176.98	黒曜石F	1.2	0.75	0.15	0.12	端部欠損
	14	細石刃	E-9	A	VII	92	176.86	黒曜石A	0.8	0.6	0.15	0.08	中央部
	15	細石刃	E-9	A	VII	50	177.07	黒曜石G	1.1	0.75	0.15	0.18	中央部
	16	細石刃	E-9	A	VII	83	176.94	黒曜石B	0.85	0.65	0.1	0.08	中央部
	17	細石刃	F-8	B	VII	183	176.52	黒曜石F	1.05	0.65	0.15	0.1	端部欠損
	18	細石刃	F-8	B	VII	160	176.28	黒曜石G	0.8	0.55	0.1	0.08	中央部
	19	細石刃	G-9	C	VII	410	176.13	黒曜石A	1.3	0.7	0.15	0.17	中央部
	20	細石刃	F-8	C	VII	308	174.88	黒曜石A	0.65	0.9	0.2	0.18	頭部
	21	細石刃	G-11	E	VII	419	182.3	黒曜石C	0.85	0.5	0.1	0.06	端部欠損
22	細石刃	H-12	F	VII	353	181.17	黒曜石A	1.25	0.75	0.15	0.17	中央部	
23	細石刃	H-12	F	VII	354	181.16	黒曜石A	0.7	0.95	0.15	0.1	頭部	
24	細石刃	F-9	外	V	244	176.08	黒曜石A	0.8	0.5	0.2	0.08	端部欠損	
25	細石刃	G-12	外	VII	278	180.3	黒曜石G	1.3	0.55	0.1	0.09	端部欠損	
26	調整剥片	E-9	A	VII	103	176.97	黒曜石F	1.05	0.65	0.2	0.13	端部欠損	
第8	27	調整剥片	E-9	A	VII	95	176.87	黒曜石G	1.0	0.65	0.25	0.22	中央部
	28	調整剥片	E-9	A	VII	206	176.84	黒曜石F	0.9	0.6	0.25	0.13	端部欠損
	29	調整剥片	E-9	A	VII	98	176.86	黒曜石F	1.45	0.75	0.1	0.14	自然面が残存。端部欠損
	30	調整剥片	E-8	A	VII	114	176.77	黒曜石G	0.95	0.45	0.2	0.1	中央部
	31	調整剥片	F-8	B	VII	175	176.39	黒曜石E	0.9	0.75	0.1	0.1	
	32	調整剥片	F-8	B	VII	187	176.44	黒曜石E	0.9	0.6	0.15	0.1	中央部
	33	調整剥片	F-8	C	VII	273	175.14	黒曜石C	0.9	0.7	0.1	0.1	
	34	調整剥片	F-10	D	VII	509	179.93	黒曜石C	1.0	0.55	0.1	0.07	端部欠損
	35	調整剥片	H-12	F	VII	318	181.04	黒曜石A	1.0	0.4	0.15	0.05	
	36	調整剥片	H-11	F	VII	313	181.31	黒曜石A	1.8	1.0	0.15	0.45	
	37	調整剥片	G-9	C	VII	346	176.16	瑪瑙	2.35	0.9	0.45	0.69	
	第9	38	二次加工のある剥片	F-8	B	VII	159	176.22	黒曜石E	1.65	0.7	0.25	0.35
39		スクレーパー	G-11	F	VII	22	180.7	黒曜石K	2.25	2.0	0.85	3.49	背面に自然面が大きく残る。縄文時代早期の可能性
40		使用痕のある剥片	F-8	C	VII	291	175.18	瑪瑙	2.4	1.65	0.6	2.13	右側縁下方に使用痕
41		使用痕のある剥片	E-9	A	VII	46	177.29	頁岩	5.8	2.3	1.3	20.65	背面に自然面が大きく残る縦長剥片
42		石核	G-9	C	VII	311	176.94	チャート	3.35	3.55	2.2	23.74	求心的な剥離
43		二次加工のある剥片	E-9	A	VII	208	176.35	蛋白石	4.3	2.55	1.0	8.79	背面に自然面が大きく残る。右側縁に二次加工痕
44		使用痕のある剥片	F-8	B	VII	191	176.49	頁岩	3.05	3.8	1.0	12.54	両側縁に微細な刃こぼれ状の剥離痕

第5節 縄文時代早期(V層)の調査

1 遺物の出土状況(第9図)

遺物は調査区の東西方向にベルト状に分布している。さらに詳細に観察すると、8区と9区に散漫な分布が見られ、調査区の中央の10区と11区では疎らである。調査区の東部分にあたるG-12区とH-12区にかけて幾分の集中が見られる。

2 出土遺物の概要

(1) 土器(表9・第9図)

総出土点数は35点で、当該時期の遺物包含層であるV層から出土したのは22点である。V層より上位の層から9点の土器が出土しているが、後世の攪乱による移動の結果であろう。また、VI層からは4点の土器が出土しているが、同層は本来、遺物を含まない火山灰層であることから、出土層の同定違いあるいは何らかの原因によってV層から落ち込んだ遺物であると考えられる。

土器の分布状況を見ると、H-12区付近に12点程度が集中しているものの、調査区全体では疎らな分布状況である。

また、接合後、土器の胎土・器面調整を観察した結果から推定すると、土器の個体数は多くとも3個体程度である。

(2) 石器(表10・表11・第9図)

総数で90点の遺物が出土した。器種別では、チップ25点(27.8%)、剥片50点(55.5%)、石鏃7点(7.7%)、石鏃未製品1点(1.1%)、石斧2点(2.2%)、石斧未製品及び石斧状加工品4点(4.4%)、敲石1点(1.1%)という組成になっている。スクレーパーや石匙が1点も出土していない点は注目される。

これらには、表層から出土した剥片1点、II層から出土した剥片・チップ4点、III層から出土したチップ1点、IV層から出土した剥片・チップ12点、VI層から出土した剥片・チップ6点、表層から出土した石斧未製品3点、IV層から出土した石鏃1点も含まれている。先述したように縄文時代前期の土器片はII層から2点、III層から2点、V層から1点出土している。したがって、上記のVI層以外から出土した石器も縄文時代前期に属する可能性があるのだが、所属時期の特定は困難なので便宜的に縄文時代早期の石器として取り扱った。

表9 出土土器組成表

時代・時期	層位	表層・表探	II層	III層	IV層	V層	VI層	合計
縄文時代早期	点数	1	2	2	4	22	4	35
	重量(g)	34	13	11	45	330	175	608
縄文時代前期	点数		2	2		1		5
	重量(g)		8	11		8		27
古墳時代	点数	193	82	5		3		283
	重量(g)	2,105	2,168	46		28		4,347
古代・中世	点数	11				1		12
	重量(g)	165				7		172
合計	点数	205	86	9	4	27	4	335
	重量(g)	2,304	2,189	68	45	373	175	5,154



第9図 縄文時代早期の遺物出土状況

出土した石材の総重量は3,017gとなっている。石材ごとの内訳は、黒曜石31.59g(1.15%)、頁岩1,482g(49.12%)、チャート0.55g(0.02%)、流紋岩1.6g(0.05%)、粘板岩214.6g(7.11%)、砂岩1,147g(38%)、安山岩140g(4.64%)である。石材の重量別では頁岩と砂岩が突出しているが、これらの石材を素材とした剥片や製品自体が大型なので当然の数値である。石製の石材としては、黒曜石2点、頁岩2点、チャート1点、流紋岩2点となっている。

表10 縄文時代石材別点数一覧表

種別	石材	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石D	黒曜石E	黒曜石F	黒曜石G	黒曜石H	黒曜石K	頁岩	チャート	流紋岩	粘板石	砂岩	安山岩	合計
チップ	点数	8	2	4	6	1	4										25
	比率(%)	8.9	2.2	4.4	6.7	1.1	4.4										
剥片	点数	12		1	2	3					25			3	2		48
	比率(%)	13.3		1.1	2.2	3.3					27.8			3.3	2.2		53.3
二次加工のある剥片	点数										1						1
	比率(%)										1.1						1.1
使用痕のある剥片	点数										1						1
	比率(%)										1.1						1.1
石鏃	点数							1	1	2	1	2					7
	比率(%)							1.1	1.1	2.2	1.1	2.2					7.7
石鏃未製品	点数							1									1
	比率(%)							1.1									1.1
石斧	点数									1					1		2
	比率(%)									1.1					1.1		2.2
石斧未製品	点数									3					1		4
	比率(%)									3.3					1.1		4.4
敲石	点数															1	1
	比率(%)															1.1	1.1
合計	点数	20	2	5	8	4	4	1	2	33	1	2	3	4	4	1	90
	比率(%)	22.2	2.2	5.5	8.9	4.4	4.4	1.1	2.2	36.7	1.1	2.2	3.3	4.4	4.4	1.1	100

表11 縄文時代石材別重量一覧表

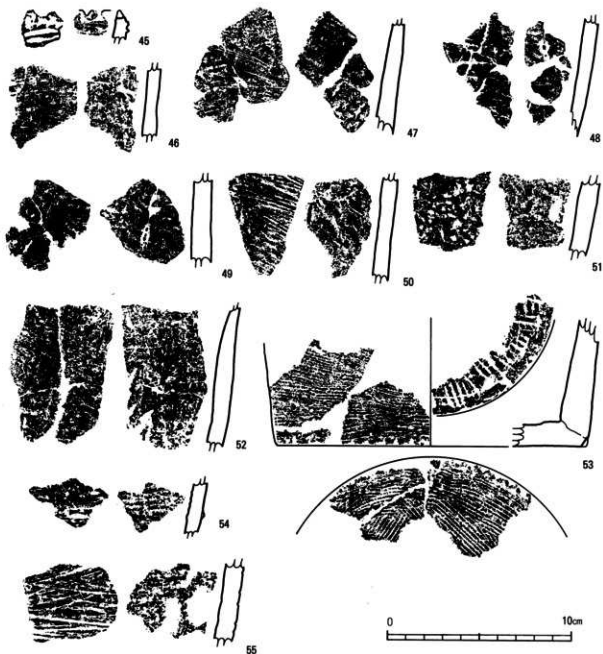
種別	石材	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石D	黒曜石E	黒曜石F	黒曜石G	黒曜石H	黒曜石K	頁岩	チャート	流紋岩	粘板石	砂岩	安山岩	合計
チップ	重量	1.02	0.53	2.18	0.72	0.05	0.24										4.74
	比率(%)	0.03	0.02	0.07	0.02	-	-										
剥片	重量	13.46		0.66	2.86	4.55					686.7			7.1	0.55		939.5
	比率(%)	0.45		0.02	0.09	0.15					22.76						31.14
二次加工のある剥片	重量										90						90
	比率(%)										2.98						2.98
使用痕のある剥片	重量										19.33						19.33
	比率(%)										0.64						0.64
石鏃	重量							0.41	1.2	1.05	0.55	1.6					4.81
	比率(%)							0.01	0.04	0.03	0.02	0.05					0.16
石鏃未製品	重量									3.71							3.71
	比率(%)									0.12							0.12
石斧	重量									80					550		630
	比率(%)									2.65					18.23		20.88
石斧未製品	重量									605					580		1,185
	比率(%)									20.03					19.2		39.28
敲石	重量															140	140
	比率(%)															4.64	4.64
合計	重量	14.48	0.53	2.84	3.58	4.6	0.24	0.41	4.91	1,482	0.55	1.6	214.6	1,147	140		3,017
	比率(%)	0.48	0.02	0.09	0.12	0.15	-	0.01	0.28	49.12	0.02	0.05	7.11	38.00	4.64		100

3 遺物

(1) 縄文時代早期の土器(第10図45~53)

35点の土器を接合した結果、資料数は33点となり、9点を図示した。すべてが円筒形土器の岩本式土器の破片である。

45は外側に傾斜する断面形状がくさび形の口縁部破片である。小さな波状口縁となるのが特徴で、外面には1条の貝殻腹縁刺突線文が巡る。46~52は胴部破片である。内面は工具ナデにより丁寧に仕上げられる。外面調整は草の茎あるいはブラシ状の工具によるナデ調整で、粗い擦痕が観察される。特に47や50の外面では擦痕が顕著である。45と46は現場での取り上げ番号が同一であったが、接合できなかった。47~49は胎土・色調・調整から判断して同一個体であると思われる。53は底径が17cm



第10図 縄文時代の土器

の底部破片である。胴部外面及び底部外面は板状工具により丁寧にナデられている。底部内面には3～4条を単位とするクシ状工具による条痕が放射状に観察される。また、底部端には連続するキザミが巡らされている。

(2) 縄文時代早期以降の土器(第10図54・55)

早期に属さない土器が2点出土した。節を改めると煩雑なので、ここで説明する。

54はⅡ層から出土した縄文時代前期の縄式土器の胴部である。内面は貝殻条痕調整、外面は貝殻条痕後ナデ調整である。外面には断面三角形の細い突帯が横位に貼付されている。

55は表層から出土した型式名不明の土器である。焼成は堅緻で、胎土に石英、長石、角閃石を含んでいる。内面は剥落しているために器面調整は不明だが、外面にはブラシ状の工具によると思われる粗い条痕が観察される。縄文時代後期に属する土器であろうか。

(3) 石器(第11図56～63, 第12図～第14図)

石鏃(56～62) 56・58～60はⅤ層から、57・61・62はⅦ層から出土した。

Ⅶ層から出土した3点は、細石器と相伴する遺物である可能性もあるが、何らかの原因によってⅤ層からⅦ層に移動した遺物であると考えられ、以下の理由により縄文時代早期に属するものと判断した。①Ⅶ層からは57と62の素材となった頁岩と同質の石材が出土しておらず、Ⅴ層から同質の石材を素材とする剥片が出土する。②61の素材は黒曜石Jの剥片であるが、Ⅶ層から同質の石材の剥片等が出土していない。

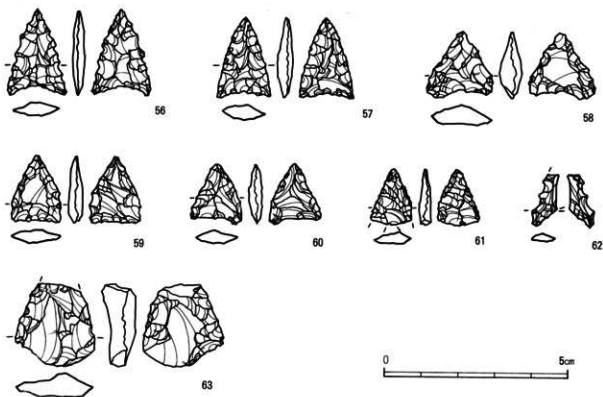
表12 縄文時代の土器観察表

押印番号	番号	出土区	層	取上番号	標高(m)	型式	部位	法量	胎土	焼成	色調	調整	文様	備考
第	45	E-11	V	208	178.39	岩本式	口縁部		長石	良好	内外 灰褐色 黒褐色	内外 工具ナデ ナデ	液状口縁, 1条の 貝殻刺突痕	
	46	E-11	V	208	178.39	岩本式	胴部		石英・長石・角閃石	良好	内外 暗黄灰色 黒褐色	内外 ヘラケズリ 工具ナデ		
	47	H-12	V	352	181.16	岩本式	胴部		長石	良好	内外 灰褐色 黒褐色	内 工具ナデ 外 ブラシ状工具ナデ		
	48	H-12	V	352	181.16	岩本式	胴部		長石	良好	内外 灰褐色 黒褐色	内 工具ナデ 外 ブラシ状工具ナデ		同一個体
	49	H-12	V	353	181.16	岩本式	胴部		石英・長石・角閃石	良好	内外 淡褐色 淡褐色	内 工具ナデ 外 ブラシ状工具ナデ		
10	50	F-11	V	239	180.11	岩本式	胴部		石英・長石・角閃石・白色の砂	良好	内外 暗黄褐色 淡褐色	内 工具ナデ 外 板状工具ナデ		
	51	G-10	V	45	180.39	岩本式	胴部		石英・長石・角閃石	良好	内外 灰褐色 黄褐色	内外 ナデ ナデ		
	52	E-10	V	209	177.97	岩本式	胴部		石英・長石	良好	内外 赤褐色 赤褐色	内外 工具ナデ 工具ナデ		
	53	H-12	VI	335～337	180.89	岩本式	底部	底径17cm	石英・長石・角閃石	良好	内外 灰褐色 黄褐色	内 工具ナデ 底内 クシ状条痕 外 板状工具ナデ	底部端部に連続 キザミ	
	54	E-8	II	158	178.22	縄式	胴部		石英・長石・角閃石・白色の砂	良好	内外 暗黄褐色 黒褐色	内 貝殻条痕 貝殻条痕後ナデ	断面三角凸帯貼 り付け	
55	不明	表	表探	不明	不明	胴部		石英・長石・角閃石	良好	内外 暗褐色 暗褐色	内 蒸 外 ブラシ状工具ナデ			

③黒曜石Jの剥片等はV層とⅦ層のいずれからも出土していないが、Ⅶ層から出土した別素材の剥片等の中にも、石鏃製作に関連すると思われるものは確認されなかった。④62はこれまでに県内で出土した縄文時代草創期に属する石鏃の形態と異なっている。⑤細石器文化に属するとされたスクレーパー(39)に関連して述べたとおり、V層とⅦ層の間層であるサツマ火山灰の堆積が不安定な部分がある。

56はF-11区から出土した流紋岩剥片を素材とする完形品である。両側縁部の調整は粗く、鋸歯状となっている。57はF-12区から出土した頁岩剥片を素材とする完形品である。基部の挟りが浅く、湾曲する形態は56と共通する。58は黒曜石Kの剥片を素材とする。腹面側の剥離は浅く、素材剥片の主要剥離面が大きく残っている。厚さは0.5cmと肉厚であり、未製品に近い状態である。59は56と同質の流紋岩剥片を素材とする完形品である。出土区は不明である。60はG-12区から出土したチャート剥片を素材とする正三角形の完形品である。61はG-12区から出土した黒曜石Jの剥片を素材とする石鏃である。脚部が両方とも欠損しており、全体形状は不明である。62はE-9区から出土した頁岩剥片を素材とする石鏃の脚部である。鋸歯状の側縁部が特徴的である。

石鏃未製品(63) E-9区Ⅳ層から出土した。Ⅳ層は本来無遺物層であるアカホヤ火山灰に相当するため、早期以外の時期に属する可能性もあるが、早期の遺物として取り扱った。黒曜石Kの剥片を素材とする。表裏面の調整剥離は浅いままで、体部の厚さは0.65cmと非常に厚い。先端部が欠損し、製作途中で放棄された未製品であると考えられる。

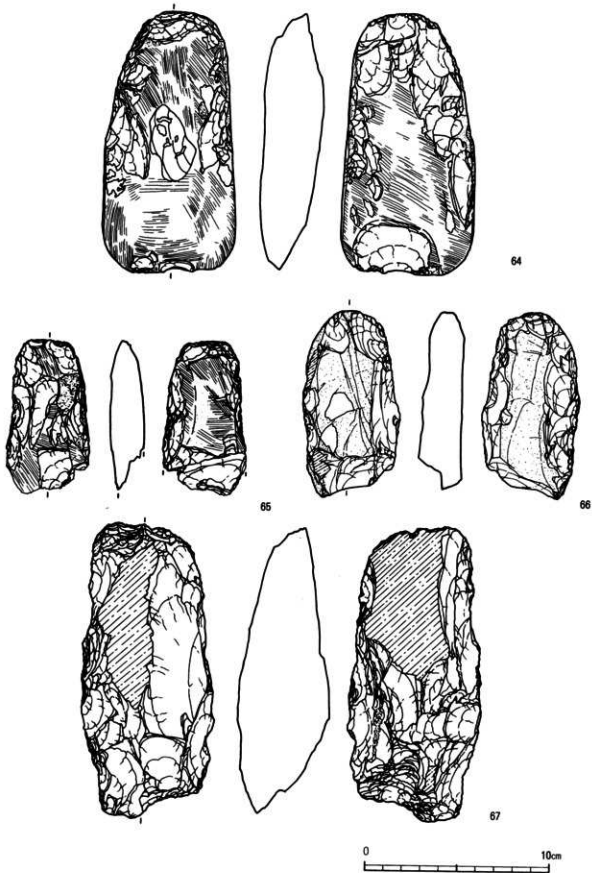


第11図 縄文時代早期の石器(1)

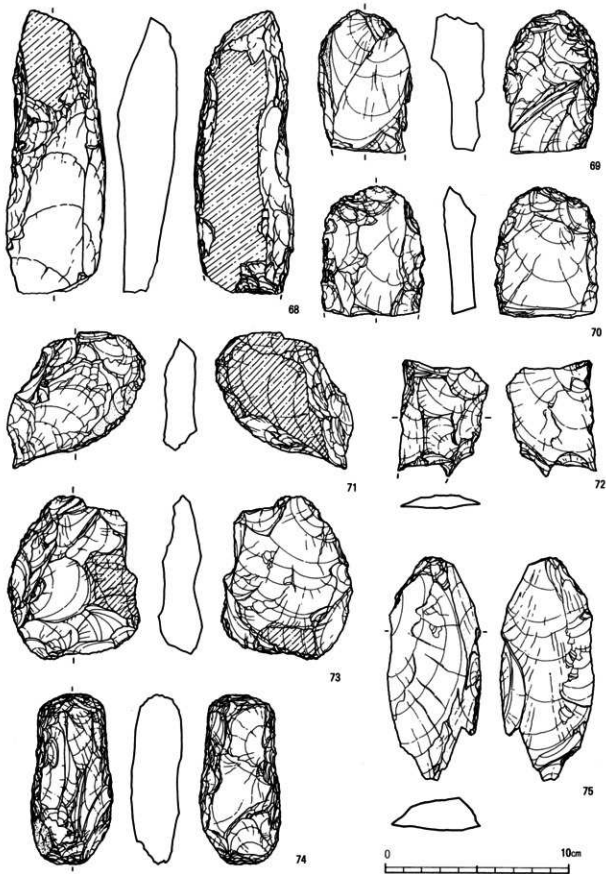
石斧(64・65) 64はF-8区から出土した砂岩製の完形品である。自然礫が素材だと思われるが、自然面は製作過程で完全に除去されている。刃部に見られる剥離は使用に伴うものであろう。65はF-10区から出土した頁岩製の欠損品である。表面方向からの力によって刃部が大きく欠損している。

石斧未製品(66~68) 66はE-9区のV層から出土した頁岩製の未製品である。表裏面には節理面に類似した面が観察される。刃部付近で大きく欠損している。形状調整はほぼ終了していることから、敲打整形途中で刃部が折損したものであろう。67は表層から出土した砂岩製の未製品である。表裏両面に素材剥片の節理面が残されている。ほぼ全面に周縁部からの剥離が加えられ、形状調整途中の未製品であることが確認できる。両側縁から加えた剥離は中央部分で稜を形成し、体部中央部分の厚さは約5.1cmと厚いままで、縦断面形状はレンズ状となっている。また、刃部を想定した部分には下方からの剥離が観察されるが、これらの剥離も途中でステップしてしまい、中央部分にまで達していない。以上のようなことが原因で、製作を放棄したものであろう。68は表層から出土した。石材は頁岩である。表裏面に節理面が残る。表面には体部の5分の3にまで達する、下方向からの加撃による大きな1枚の剥離が観察される。側縁からの剥離は概して浅く、中央付近にまで達しているものはわずかである。

剥片(69~73・75~78) 69~71は石斧未製品の可能性もある剥片である。69はG-11区のV層から出土した。表面には2枚の大きな剥離が観察される。裏面にはステップした下方からの大きな剥離のほか、周縁部からの多数の小さな剥離が観察される。70はG-12区のV層から出土した。裏に主要剥離面が大きく残る頁岩剥片である。表面には周縁部からの小剥離が施されている。71はE-10区のV層から出土した。部分的に節理面が残る剥片である。周縁部から加えられた剥離により石斧状の形状となっている。しかし、石斧製作途中の折面と想定できる部分にも表裏面に二次的な剥離を加えており、製作途中で折損した未製品の状況とは異なっている。72はE-10区のV層から出土した。石斧の形状調整に製作に伴う剥片だと推定される。表面は複数の剥離面によって構成されるが、裏面は1枚の主要剥離面となっている。73はE-8区のV層から出土した。きめの細かい頁岩が素材である。剥片素材の石核の可能性も考えられるが、表面の剥離は素材剥片剥離に先行する剥離だけのようである。75~77は同一母岩から剥出された灰色を呈する剥片である。75と76はE-9区のV層から出土し、77はE-9区のII層から出土した。これらと同質の石材の剥片を用いた剥片石器は出土していない。75は表面に素材となった石材の自然面が残っている。剥片自体は縦長の剥片だが、剥片剥離に先行する表面の剥離は横方向からの加撃によるものである。76は横長の剥片である。石核の平坦な節理面を打面として利用している。表面には自然面が残るほか、同一打面から加えられた剥片剥離に先行する上方向からの複数の剥離が観察される。77は単一の剥離によって作られた平坦面を打面とする横長の剥片である。表面には剥片剥離に先行する同一打面からの横長の剥離面が観察される。78は粘板岩の剥片である。平坦な節理面を打面として利用している。一見すると縦長剥片に見えるが、裏面を観察すると横長の短冊状の剥片が節理面で折れたものだとわかる。表面に残された剥片剥離に先行する剥離も同一打面、同一方向から加えられた加撃によるものである。

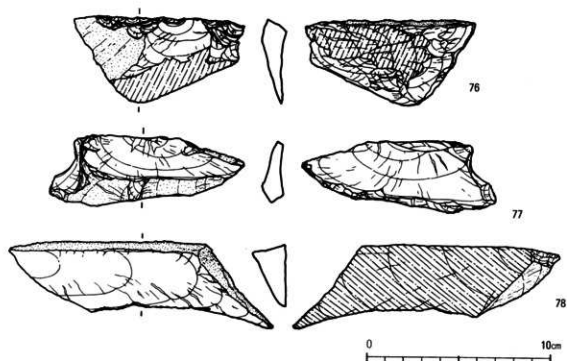


第12図 縄文時代早期の石器（2）



第13図 縄文時代の石器（3）

石斧状加工品(74) G-9区のV層から出土した。きめの細かい頁岩を素材とする。周縁部からの剥離により形状を調整されている。形状的には石斧に類似するが、横断面は楕円形であり、石斧を目指して加工を加えた可能性は低い。



第14図 縄文時代早期の石器(4)

表13 縄文時代の石器観察表

標本 番号	番号	器種	出土区	層	取上 番号	標高 (m)	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	観察所見
第 11 図	56	石 鏃	F-11	V	242	180.18	流紋岩	2.15	1.5	0.4	0.82	完形品
	57	石 鏃	F-12	VII	282	178.63	頁岩	2.2	1.45	0.35	0.87	完形品
	58	石 鏃	F-8	V	222	176.95	黒曜石K	1.8	1.8	0.5	1.2	完形品
	59	石 鏃	不明	V	無し	不明	流紋岩	1.8	1.4	0.35	0.78	完形品
	60	石 鏃	G-12	V	228	180.9	チャート	1.6	1.4	0.35	0.55	完形品
	61	石 鏃	G-12	VII	13	180.34	黒曜石J	1.5	1.1	0.25	0.41	両脚欠損
	62	石 鏃	G-11	VII	23	180.66	頁岩	1.4	0.7	0.2	0.18	片脚のみ
	63	石鏃未製品	E-9	IV	196	178.44	黒曜石K	2.2	2.15	0.65	3.71	
	64	石 斧	F-8	V	182	176.91	砂岩	14.2	7.2	3.2	550	完形品
	65	石 斧	F-10	V	250	179.72	頁岩	8.3	4.5	1.9	80	刃部欠損
	66	石斧未製品	E-9	V	215	178.04	頁岩	10.2	5.2	2.3	155	刃部欠損
第 12 図	67	石斧未製品	不明	表層	無し	不明	砂岩	16.1	7.2	5.1	580	表裏に磨理面
	68	石斧未製品	不明	表層	無し	不明	頁岩	15.4	5.2	3.2	300	表裏に磨理面
	69	剥片	G-11	V	253	180.72	頁岩	7.7	4.9	2.7	130	石斧未製品?
	70	剥片	G-12	V	244	180.32	頁岩	7.1	5.1	1.7	91	石斧未製品?
	71	剥片	E-10	V	210	177.91	粘板岩	6.4	6.6	1.9	101	石斧未製品?
	72	剥片	E-10	V	165	178.74	頁岩	5.9	4.5	0.8	25	石斧未製品?
	73	剥片	E-8	V	184	177.46	頁岩	8.8	6.9	2.3	163	石核?
	74	石斧状加工品	G-9	V	無し	不明	頁岩	9.2	4.4	2.3	150	
第 14 図	75	剥片	E-9	V	213	178.2	頁岩	12.1	5.1	1.7	110	
	76	剥片	E-9	V	212	178.2	頁岩	4.6	9.05	1.3	49	同一母岩
	77	剥片	E-9	II	140	178.69	頁岩	3.85	9.2	1.35	47	
	78	剥片	F-10	IV	248	179.81	粘板岩	11.2	3.8	2.0	105	

第6節 古墳時代(Ⅱ層)の調査

1 遺構の概要(第16図)

調査では5基の土坑が検出されたが、近代の土坑を除外すると当該時期の土坑はE-8区で検出された1基だけとなった。

また、調査区内からは20数基のピットが検出されたが、樹痕と思われるものがほとんどであったために図面は掲載しなかった。

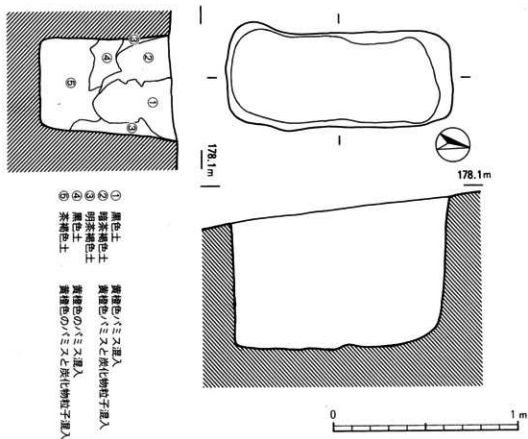
住居跡などの生活に直接関連するような遺構は検出されなかった。

2 土坑(第15図)

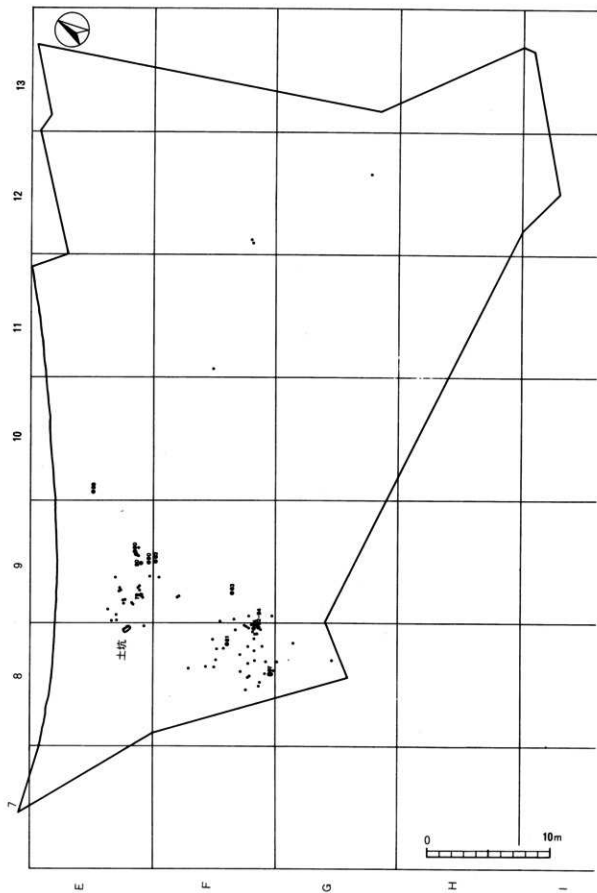
E-8区のV層上面で検出された。平面形は、縦1.23m×横0.52mの長方形で、検出面からの深さは約0.8mである。埋土の堆積状況はいわゆるレンズ状堆積を示しておらず、自然堆積によって埋まったものではなさそうである。埋土内からは遺物は出土せず、性格は不明である。

3 遺物の出土状況と概要(表9・第16図)

出土遺物は土器片だけであった。遺物包含層であるⅡ層は、耕作によって削平されている部分が多いため、土器片はかろうじて削平を免れていたE-9区とF-8区を中心に出土した。



第15図 土坑



第16図 古墳時代の遺物出土状況

総数で283点の土器が出土している。出土層位ごとの内訳は、表層193点、Ⅱ層82点、Ⅲ層5点、Ⅴ層3点となっている。表層から出土した193点は、全体の68%を占めるものであり、Ⅱ層が人為的な削平や攪乱を受けた結果を反映している。遺物包含層であるⅡ層より下位から出土した8点は、何らかの原因で下層に落ち込んだものであろう。

土器の総重量は4,347gである。表層から出土した土器は耕作によって細片となったため、点数ではⅡ層から出土した82点の2倍以上の193点ではあるが、双方とも重量は2,100g程度であった。

土器型式としては、中津野式類似の土器と成川式の二型式が見られる。

器種としては、甕形土器が中心で、わずかに壺形土器の破片が出土した。縄文時代の土器に比べて点数的にははるかに多いが、胴部破片がほとんどだったために完形に復元できる資料は出土しなかった。

4 土器(第17図79~94・第18図95~98)

出土した土器片283点を接合した結果、資料数は275点となり、20点を図示した。

79~90は成川式の甕形土器の破片である。79と80は外面に断面三角形の1条の突帯を貼付する。いずれも胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好である。口縁端部は平坦に仕上げられている。79は外側に開きながら若干内湾するが、80は直線的に外側に開いている。工具ナデによる器面調整が施され、細かな擦痕が観察される。81~85は外側に開きながら外反する口縁部である。突帯はこれより下位に貼付されるものと思われる。いずれも口縁端部は平坦となっている。86~89は甕形土器の突帯部分である。86の突帯は断面三角形で、前記79・80の口縁部と共通する。87と88は断面が方形の突帯を貼付する。89は断面三角形の突帯に左下がりのヘラ刻みを施している。90は甕形土器の胴部である。幅広のヘラ状工具による器面調整が施されている。

91も甕形土器の口縁部だと思われるが、端部が丸く収められる点が他の資料とは異なっている。

92~95は中津野式類似の甕形土器であり、同一個体だと思われる。焼成は良好だが、成川式土器に比較すると軟質な感触である。94はF-8区から出土した4点が接合したもので、口径は22.4cmである。内外面とも器面調整はハケナデであるが、器面の剥落が著しい。96も中津野式類似の甕形土器の胴部である。

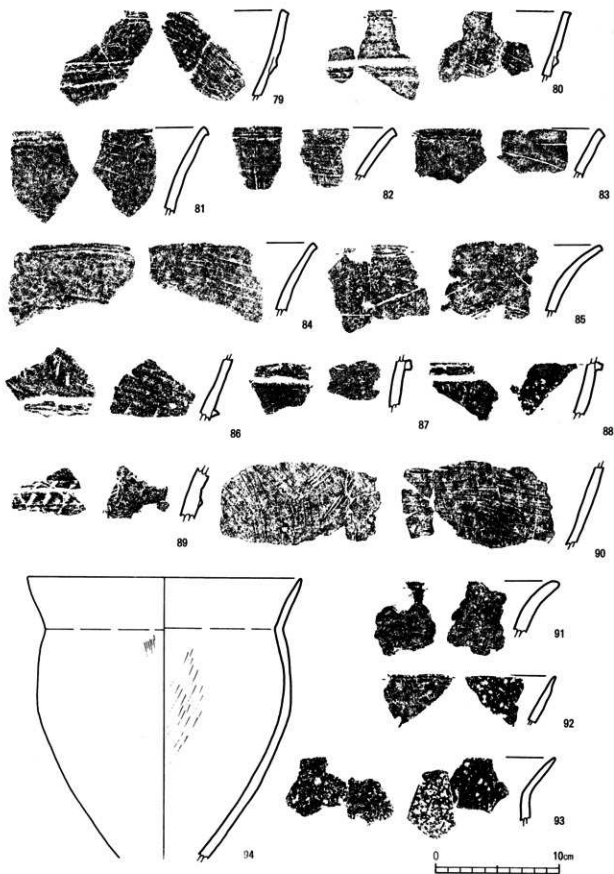
97はF-8区で出土した小型の壺形土器の底部である。内外面とも工具ナデ調整で、底径は6.4cmである。

98は大型の壺形土器の底部である。内外面とも工具ナデ調整である。

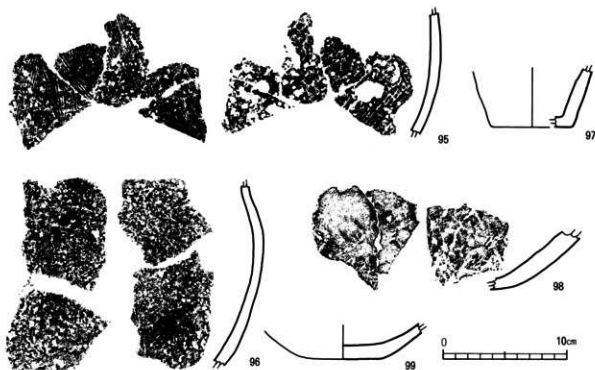
5 土師器(表9・第18図99)

表層から11点、Ⅴ層から1点の合計12点の土師器が出土した。本来の遺物包含層はⅡ層と思われるのでここで取り上げた。時期的には古墳時代より下った古代・中世の遺物である。

99の1点だけを図示した。内外面とも器面は磨滅している。底径は7.4cmで、壺形土器の底部だと思われる。焼成は良好。胎土は精選されている。



第17図 古墳時代の土器（1）



第18図 古墳時代の土器(2)・土師器

表14 古墳時代の土器観察表

標記番号	番号	出土区	層	取上番号	標高(m)	器種	部位	法量	胎土	焼成	色調	調整	文様	
第17図	79	E-9	II	119	178.73	甕	口縁部		砂粒	良好	内外 暗黄褐色	内外 工具ナデ	1条の貼付凸帯	
	80	不明	表	無し	不明	甕	口縁部		砂粒	良好	内外 黒褐色	内外 工具ナデ	1条の貼付凸帯	
	81	F-8	II	92	178.16	甕	口縁部		石灰・長石・角閃石・小礫	良好	内外 暗黄褐色	内外 工具ナデ(朱風)		
	82	F-9	II	134	178.93	甕	口縁部		砂粒	良好	内外 黒褐色	内外 工具ナデ		
	83	F-9	II	37	178.5	甕	口縁部		石灰・長石・角閃石・小礫	良好	内外 黒褐色	内外 工具ナデ(朱風)		
	84	F-8	II	98	178.47	甕	口縁部		石灰・長石・角閃石	良好	内外 暗黄褐色	内外 工具ナデ(横)		
	85	不明	表	無し	不明	甕	口縁部		小礫	良好	内外 淡黄灰色	内外 工具ナデ		
	86	不明	表	無し	不明	甕	胴部		小礫	良好	内外 暗黄褐色	内外 工具ナデ	1条の貼付凸帯	
	87	不明	表	無し	不明	甕	胴部		砂粒	良好	内外 淡黄褐色	内外 工具ナデ	1条の貼付凸帯	
	88	不明	表	無し	不明	甕	胴部		小礫・砂粒	良好	内外 淡黄灰色	内外 工具ナデ	1条の貼付凸帯	
	89	不明	表	無し	不明	甕	胴部		小礫	良好	内外 淡黄灰色	内外 工具ナデ	1条の貼付凸帯	
	第18図	90	E-9	II	135 139 162 163 178.85 178.99 178.93 178.95		甕	胴部		小礫	良好	内外 黒褐色	内外 工具ナデ	
		91	不明	表	無し	不明	甕	口縁部		石・小礫	良好	内外 灰・淡黄褐色	内外 工具ナデ	
		92	F-8	II	97	178.54	甕	口縁部		石灰・長石・角閃石	良好	内外 灰・淡黄褐色	内外 工具ナデ(横)	
		93	不明	表	無し	不明	甕	口縁部		石灰・長石・角閃石	良好	内外 暗黄褐色	内外 工具ナデ(剥落)	
		94	F-8	II	93 97 98 121	178.35 178.54 178.47 177.93	甕	口縁部	口径 22.4cm	小礫	良好	内外 黄褐色	内外 ハケ(剥落)	
	第18図	95	F-8	II	97,98	178.54	甕	胴部		小礫	良好	内外 灰褐色	内外 ハケ(剥落)	
96		C-8	II	268	178.29	甕	胴部		石灰・長石・角閃石・小礫	良好	内外 淡黄褐色	内外 工具ナデ(剥落)		
97		F-8	II	106 107	177.94 177.92	小壺?	底部	底径 6.4cm	小礫	良好	内外 淡黄灰色	内外 ナデ		
98		E-10	II	166	178.85	壺	底部		石灰・長石・角閃石	良好	内外 暗黄褐色	内外 工具ナデ		

第5章 調査のまとめ

旧石器時代ナイフ形石器文化時期に該当する遺物は、大隅降下軽石層(約24,000年前)の下から出土している。県内のほとんどの地域では、始良カルデラからの一連の噴出物である大隅降下軽石・入戸火砕流・始良丹沢火山灰(シラス)に厚く覆われており、噴出以前の文化層の調査を困難なものとしている。今回の調査ではわずかに22点の遺物しか出土しなかったために詳細な内容は不明である。あえていうならば、頁岩やチャートなどの黒曜石以外の石材を使用したナイフ形石器文化であると推定される。町内に所在する粘地遺跡の大隅降下軽石層の下から出土したナイフ形石器については「瑪瑙系や頁岩のほかに黒曜石は広域の原産地のものを使用し、ナイフ形石器と台形棒石器から構成されている」と報告されている。本遺跡からはツールが出土していないが、類似した様相である可能性が高い。いずれにせよ、喜入町内の南薩山地の東側一帯が24,000年以前の旧石器文化を探るうえで、良好なフィールドであることが確認された意義は大きいと言える。

旧石器時代細石器文化時期の遺物は細石刃核8点、石核1点、スクレーパー1点以外は小剥片とチップが主体である。細石刃核は野岳型に相当すると思われる。細石刃剥離の状況から残核ばかりであることが判明した。また、出土した剥片の特徴として、背面に自然面を残すものは少なく、小さな剥片が多いということがあげられる。これらの事実から、遺跡内には既に完成された細石刃核が持ち込まれ、遺跡内では母岩から細石刃核を作成する作業は行われなかったことが推定される。

縄文時代早期の遺物としては、岩本式土器、石鏃、石斧などが出土している。岩本式土器はくさび状の口縁部断面形態と器面調整に特徴がある。後出する円筒形土器が貝殻条痕調整であるのに対して、岩本式土器は草の茎を束ねたような工具あるいはブラシ状の工具によって器面調整され、細かな擦痕が見られるものが多いという特徴がある。器高は30cm未満の小型のものが多いが、30cmを越すような大型のものがまれに出土する。大型土器の底部の接地面は、53に見られるように木口状工具によって丁寧に調整される点も他の円筒形貝殻文土器とは異なった特徴となっている。

本文中で述べたⅦ層から出土したとされる石鏃3点について再度触れておきたい。本文中では出土層位の認定違いであり、縄文時代早期に属するものであるとした。さらに詳しく検証するために石鏃の出土地点と細石器のブロックとの関係を見てみることにする。それぞれの出土地点は57がF-10区、61がG-12区、62がG-11区となっており、細石器文化時期の遺物ブロックと重ね合わせると、57はブロックから外れた遺物散布のまばらな部分から出土し、61と62はFブロックの範囲と重なった部分から出土している。仮にFブロックに石鏃が含まれ、さらに層位認定に疑問が残るとしたスクレーパーまでがその組成に加わるとするならば、Fブロックは他のブロックに比較するとかなり特異な器種組成を示すこととなる。同一遺跡内におけるブロックの器種を比較すると量的な多少はあるものの、よほど特殊な事情がない限りほぼ類似した器種で構成されるのが一般的である。その点か

らえば、Fブロックだけに石鏃やスクレーパーが含まれる状況は不自然であり、石鏃とスクレーパーは縄文時代早期に属すると解釈するほうが自然である。これらの石器が本来の遺物包含層とは異なる層位から出土した原因としては、出土した付近一帯の層位が何らかの理由で乱れていたためだと思われる。

縄文時代早期の石斧としては、完成品ほかに未製品が出土している。未製品は67や68のように節理面を持つ頁岩剥片を素材としている点に特徴がある。板状に薄く割るためには、節理面を持つ石材を利用したほうが都合が良かったものと思われる。

古墳時代の遺物包含層のほとんどは削平されてしまっていたために提示できる資料は少なかったが、土器の所属時期は新旧二つの時期に分けることができる。

古い時期の土器に相当するのは92～96の資料で、弥生時代の終末から古墳時代初頭の中津野式土器と呼ばれる土器である。器面は剥落が著しいがハケナデ調整が観察される。これらはF-8区の東隅を中心に出土し、器面調整、胎土、焼成の特徴がほぼ共通することから、同一個体であると判断される。

新しい時期の土器に相当するのは79～90の資料である。甕形土器の胴部に突帯を貼付するのが特徴であり、成川式土器と呼ばれている。器種構成としては高環形土器、壺形土器、鉢形土器などが通常見られるのだが、壺形土器の破片と思われるのは97と98の2点だけである。

古墳時代の遺構としては性格不明の土坑1基が発見されただけである。住居跡などの遺構も耕作等による削平を受けて消滅したものと思われる。町内ではこれまでに野畑遺跡で1基、小六郎遺跡で1基、段之原遺跡で1基、下大原遺跡で29基の古墳時代の住居跡が発見されている。これらの遺跡が標高60m～90m程度の台地上に立地しているのに対して、本遺跡が標高180m近い山地端部に立地している点は注目されよう。

引用・参考文献

- 1 「喜入町郷土誌」喜入町郷土誌編集委員会(河野治雄) 昭和56年
- 2 「野畑遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 喜入町教育委員会 1985年3月
- 3 「西船子遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 喜入町教育委員会 1986年3月
- 4 「小六郎遺跡・段之原遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 喜入町教育委員会 1987年3月
- 5 「下大原遺跡・松木田遺跡・永野遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 喜入町教育委員会 1998年3月
- 6 「粘地遺跡(縄文編)」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 喜入町教育委員会 1999年3月
- 7 「粘地遺跡(旧石器編)」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 喜入町教育委員会 2000年3月
- 8 「東郷坂B遺跡」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 喜入町教育委員会 2001年3月

图

版



調査区全景



遺跡近景



確認調査風景



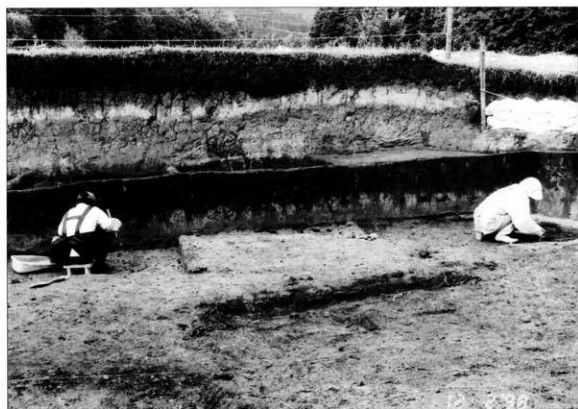
土層断面



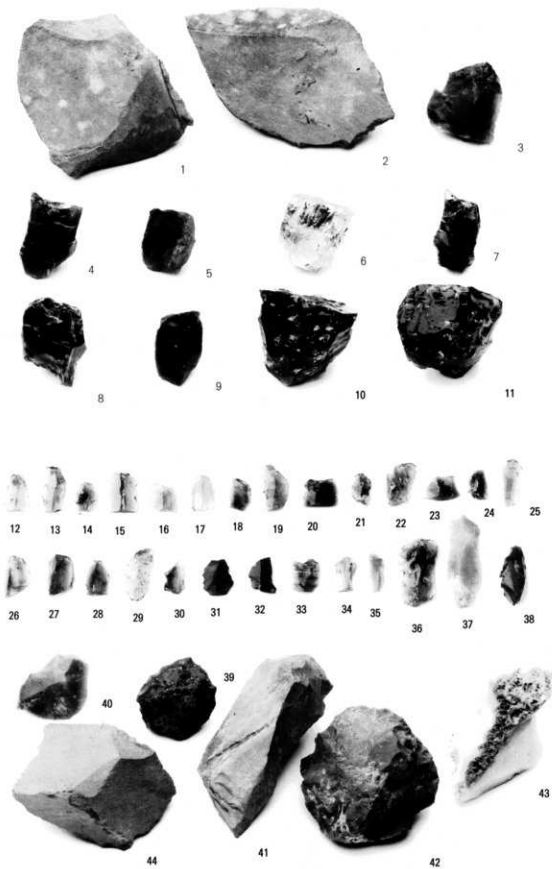
細石器文化時期の遺物包含層調査風景



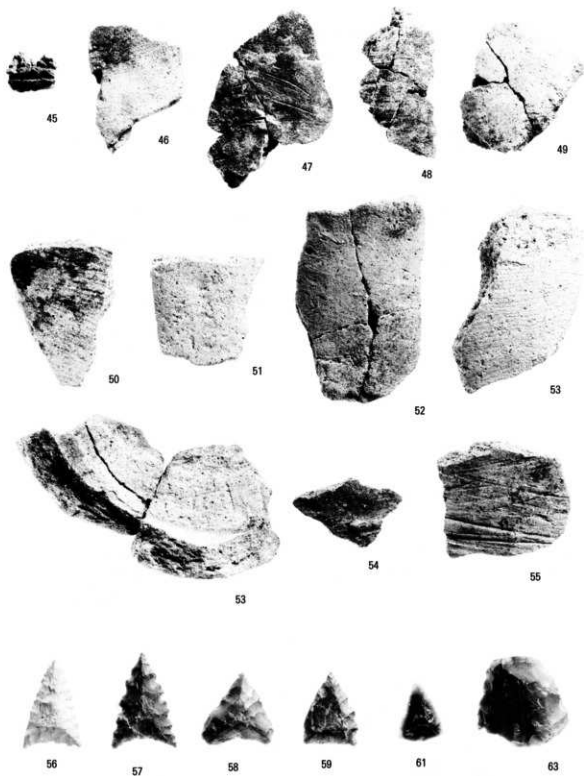
細石器文化時期の遺物出土状況



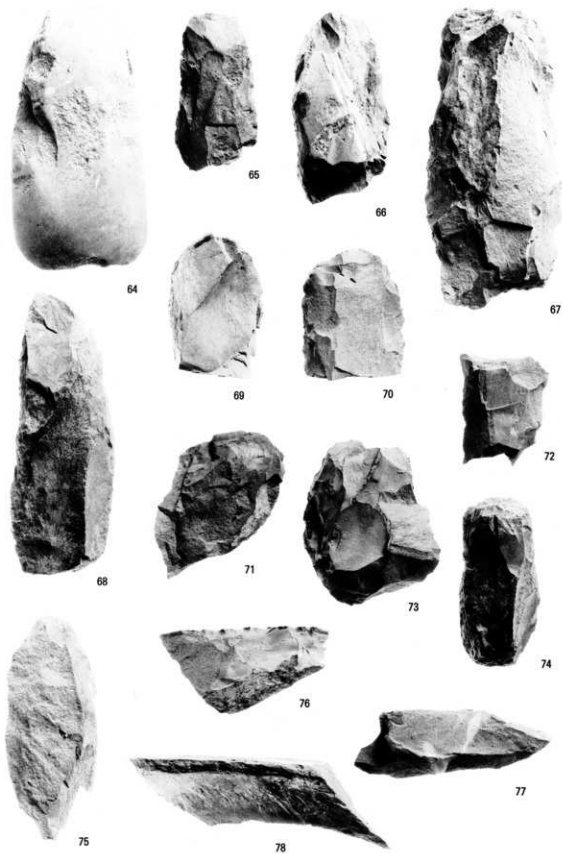
ナイフ形石器文化時期の遺物包含層調査風景



旧石器時代の石器



縄文時代の遺物（1）



縄文時代の遺物 (2)



古墳時代の遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (51)
一般地方道知覧喜入線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

鍋^{なべ}尾^お遺跡

発行日 平成15年2月28日

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1

☎ (0995) 48-5811

印刷所 有限会社 梅木印刷

鹿児島県姶良郡姶良町三拾町1888

☎ (0995) 67-2256